

迫 遺 跡
明 力 遺 跡
前 岡 河 内 遺 跡

2019

公益財團法人山口県ひとづくり財團
山口県埋蔵文化財センター

さこ
迫 遺 跡
めい りき い
明 力 遺 跡
まえ おか ごうち い
前 岡 河 内 遺 跡

2019

公益財団法人山口県ひとづくり財團

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、柳井市伊保庄地内にある迫遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、主要県道柳井上関線改良工事に先立ち、山口県柳井土木建築事務所の委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

発掘調査は、開発事業等に伴い、やむを得ず遺跡が消失する部分について、関係機関が協議を行い、記録保存を図るために実施するものです。

このたびの調査では、古墳時代から中世にかけての土坑や溝、建物の柱穴等が確認されるとともに、縄文時代から中・近世にかけての土器や石器等が発見されました。

中でも、まとまって発見された縄文時代の土器や石器は、今から約3,000年前にこの地にムラが営まれたことを示す貴重な資料といえます。

本書が郷土の歴史や文化財保護への理解を深める資料として、また、教育や文化的振興、学術研究等に広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、御指導と御協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
理事長 原 田 尚

例　言

1 本書は平成30年度に実施した迫遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡（柳井市伊保庄地内）の発掘調査報告書である。

2 調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県柳井土木建築事務所からの委託（契約名：平成30年度 主要県道柳井上関線道路改良（総合交付金・広域）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託第1工区）を受けて実施した。

3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

調査担当 次　長石井龍彦

調査第二課主任 森田孝一

調　査　員　山田圭子

4 本書の第1図は、山口県柳井土木建築事務所提供的地形図を元に作製した。第2図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「柳井」を複製使用した。

5 本書で使用した方位は国土地標（世界測地系）の北で示した。国土地標の単位はmであり、標高は海拔高度（m）である。

6 本書で使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。

7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

8 出土遺物実測図で、断面黒塗は須恵器を示す。

9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S K : 土坑　S D : 溝　S P : 柱穴　S X : 性格不明遺構　N R : 自然流路、湿地帯

10 報告書作成の過程で、石器・石製品の石材鑑定については、赤崎英里氏（山口県立山口博物館）に御教示いただいた。

11 資料の分析・鑑定に関し、種実同定並びに炭化物年代測定を業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。

12 本書の作成・執筆は、石井・森田・山田が共同で行い、編集は石井が行った。なお、執筆分担は次のとおりである。

I、III-1-(1)、2-(1)、3-1)-(3) 弥生時代以前、V：石井

III-1-(3)、2-(3)、3-1)-(3) 古代以降、2)-(3) 古墳時代以降：山田

II、III-1-(2)、2-(2)、3-1)-(1)・(2)・(3) 古墳時代、2)-(2)・(3) 弥生時代以前：森田

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	5
1 追遺跡	5
(1) 調査区の概要	5
(2) 遺構	5
(3) 遺物	10
2 明力遺跡	12
(1) 調査区の概要	12
(2) 遺構	12
(3) 遺物	15
3 前岡河内遺跡	17
1) 1地区	17
(1) 調査区の概要	17
(2) 遺構	17
(3) 遺物	24
2) 2地区	34
(1) 調査区の概要	34
(2) 遺構	36
(3) 遺物	38
IV 自然科学分析 明力遺跡出土炭化材などの年代測定および出土種実の同定	45
1 放射性炭素年代測定	45
2 種実同定	47
V 総 括	51

挿図目次

第1図 追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡 調査範囲図	2
第2図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	3
追遺跡	
第3図 遺構配置図	6
第4図 調査区南西部西壁・東壁, トレンチ2 北壁・東壁土層断面図	7
第5図 S D 1 実測図	8
第6図 S K 1 実測図	9
第7図 出土遺物実測図	10
明力遺跡	
第8図 遺構配置図	12
第9図 北区東壁北側・南側, 用水路南区 北壁土層断面図	13
第10図 N R 1 実測図	14
第11図 出土遺物実測図	15
前岡河内遺跡 1地区	
第12図 遺構配置図	18
第13図 調査区東壁土層断面図	19
第14図 S X 1 繩文土器・礫出土 状況実測図	20
第15図 S X 1 南部実測図	21
第16図 S K 1 実測図	22
第17図 S D 1・2・3 実測図	23
第18図 出土遺物実測図①	25
第19図 出土遺物実測図②	26
第20図 出土遺物実測図③	27
第21図 出土遺物実測図④	28
第22図 出土遺物実測図⑤	29
第23図 出土遺物実測図⑥	33
前岡河内遺跡 2地区	
第24図 遺構配置図	34
第25図 調査区北壁, N R 1 北壁土層 断面図	35
第26図 N R 1 実測図	36
第27図 N R 2 実測図	37
第28図 出土遺物実測図①	38
第29図 出土遺物実測図②	39
第30図 出土遺物実測図③	40
第31図 出土遺物実測図④	43
第32図 历年較正結果	46

写真目次

写真1 重機による表土除去	1	写真3 堀り込み作業	1
写真2 遺構検出作業	1	写真4 明力遺跡N R 1 出土種実	50

表目次

追遺跡			
第1表 出土遺物観察表	11	第6表 出土遺物観察表④	33
明力遺跡			
第2表 出土遺物観察表	16	第7表 出土遺物観察表①	41
前岡河内遺跡1地区			
第3表 出土遺物観察表①	30	第8表 出土遺物観察表②	42
第4表 出土遺物観察表②	31	第9表 出土遺物観察表③	44
第5表 出土遺物観察表③	32	第10表 出土遺物観察表④	44
		第11表 放射性炭素年代測定結果	46
		第12表 種実同定結果	48

図版目次

追遺跡			
図版1 追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景 (西から)		調査区東壁北部土層断面 (西から)	
追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景 (北から)		調査区東壁中央部土層断面 (西から)	
図版2 追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景 (南西から)		調査区東壁南部土層断面 (北西から)	
追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡調査 区全景 (上空から)		図版10 SK 1 遺物・礫検出状況 (西から)	
図版3 調査区全景 (上空から)		SK 1 北半部遺物・礫検出状況 (西から)	
完掘全景 (南から)		SK 1 完掘 (南西から)	
図版4 完掘全景 (北から)		SD 3 土層断面 (南東から)	
調査区南西部西壁土層断面 (東から)		SD 3 遺物出土状況 (東から)	
トレンチ2北壁 (南から)		図版11 SD 1・2・3 完掘 (北西から)	
柱穴群、SD 1、トレンチ2・3 (東から)		SD X 1 土層断面 (北西から)	
柱穴群、SD 1、トレンチ2・3 (北から)		SD X 1 遺物・礫検出状況 (南西から)	
図版5 柱穴群、SD 1、トレンチ2・3 (西から)		SD X 1 弥生土器出土状況 (北から)	
SK 1 完掘 (南から)		SD X 1 帚文土器出土状況 (南西から)	
SK 2 完掘 (東から)		SD X 1 帚文土器出土状況 (南から)	
S D 1 完掘 (北から)		SD X 1 完掘 (南西から)	
トレンチ3石列検出状況 (南東から)		図版13 出土遺物①	
図版6 出土遺物		図版14 出土遺物②	
明力遺跡		図版15 出土遺物③	
図版7 完掘全景 (西から)		図版16 出土遺物④	
調査区東壁中央部土層断面 (西から)		前岡河内遺跡2地区	
用水路南区北壁土層断面 (南から)		図版17 完掘全景 (南から)	
NR 1 完掘 (西から)		完掘全景 (北から)	
NR 1 土層断面 (西から)		図版18 N R 1 完掘 (南西から)	
図版8 出土遺物		調査区北壁西側 (南から)	
前岡河内遺跡1地区		調査区北壁東側 (南から)	
図版9 完掘全景 (南西から)		NR 2 完掘 (北から)	
調査区東壁土層断面 (北西から)		トレンチ完掘 (北西から)	

I 調査に至る経緯と調査の概要

1 調査に至る経緯

主要県道柳井上関線は、柳井市南浜を起点として、室津半島の東岸を南下し、半島がくびれた阿月から岬を越えて平生町尾国に抜け、半島の西岸を南下して上関町室津に至る。道幅が狭く見通しの悪い箇所もあり、危険回避や利便性向上のため、道路改良工事が計画された。

山口県教育委員会は、工事に先立ち、県道路建設課と協議を行い、路線に係る埋蔵文化財の取り扱いについての確認を行った。統いて、柳井土木建築事務所から照会を受け、県教育委員会は未周知の埋蔵文化財包蔵地所在の可能性が考えられる範囲を示し、事前に試掘調査による確認が必要な旨を回答した。これを受けて、平成 10 年度の伊保庄向田地区での試掘調査を経て、平成 11 ~ 13 年度には向田遺跡の発掘調査が実施された。その後、平成 18 年度の阿月地区での試掘調査を経て、平成 19 年度には吉毛遺跡の発掘調査が行われた。

平成 28 年度、柳井土木建築事務所は伊保庄地区で先に試掘調査が必要とされた範囲の工事着手について県教育委員会と協議し、平成 29 年 10 月には、県教育委員会が 3 日間試掘調査を行い、未周知の埋蔵文化財包蔵地が確認された。柳井土木建築事務所と県教育委員会は、取り扱いについて協議を行い、平成 30 年度に発掘調査を実施することになった。一方、県教育委員会は柳井市教育委員会に発見された遺跡の所在地名を照会し、今回の調査区を北から追遺跡、明力遺跡（平成 28 年度国営緊急農地整備事業に伴い、柳井市教育委員会が発掘調査を実施）の範囲拡大、前岡河内遺跡とした。

関係者による協議の結果、発掘調査は平成 30 年度に公益財團山口県ひとづくり財團山口県埋蔵文化財センターが実施することになり、柳井土木建築事務所より、4 月 2 日付けて、「平成 30 年度 主要県道柳井上関線道路改良（総合交付金・広域）工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託第 1 工区」として委託を受けた。

2 調査の概要

4 月からの事前準備を経て、5 月 9 日には追遺跡の雑草の刈り取り作業を行った。15 日には、重機による表土除去を開始し、追遺跡、明力遺跡、前岡河内遺跡 1 地区、前岡河内遺跡 2 地区の順に進め、18 日に終了した。同日には伊保庄公民館で作業員説明会を行い、28 日には器材の搬入を行った。30 日には人力による作業を本格的に開始し、最初に前岡河内遺跡 1 地区の調査区壁面の清掃、遺構検出、その後前岡河内遺跡 2 地区、追遺跡、明力遺跡の順に作業を進めた。6 月 18 日には、測量業者に委託して国土座標杭の設置を行い、続いて各



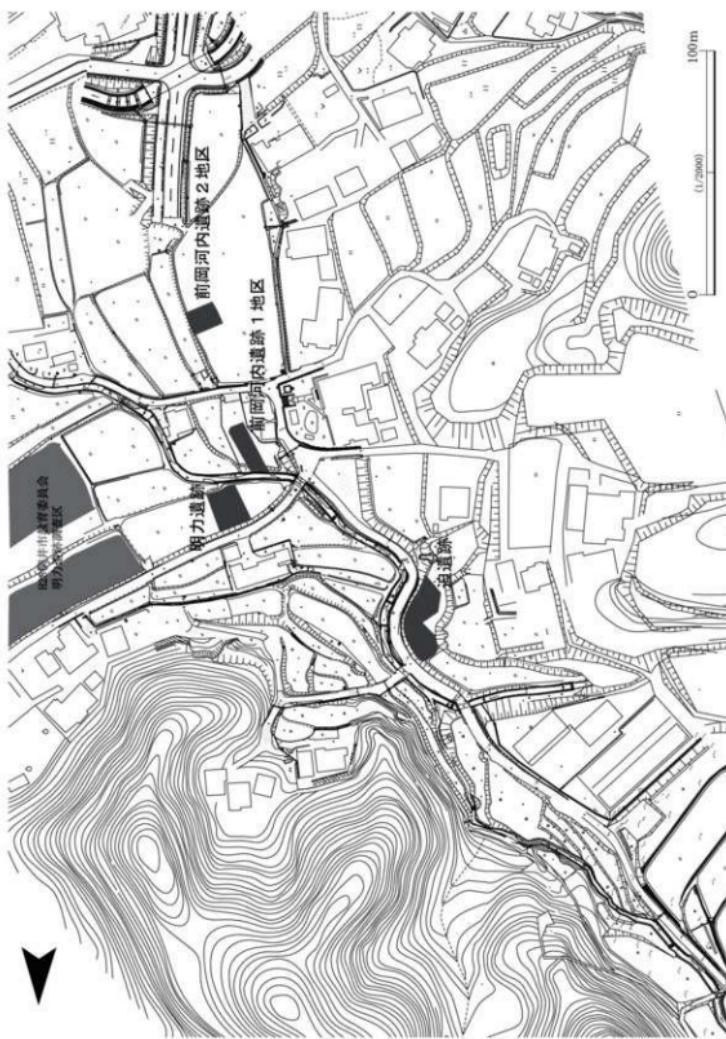
写真 1 重機による表土除去



写真 2 遺構検出作業



写真 3 掘り込み作業



第1図 波遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡調査範囲図

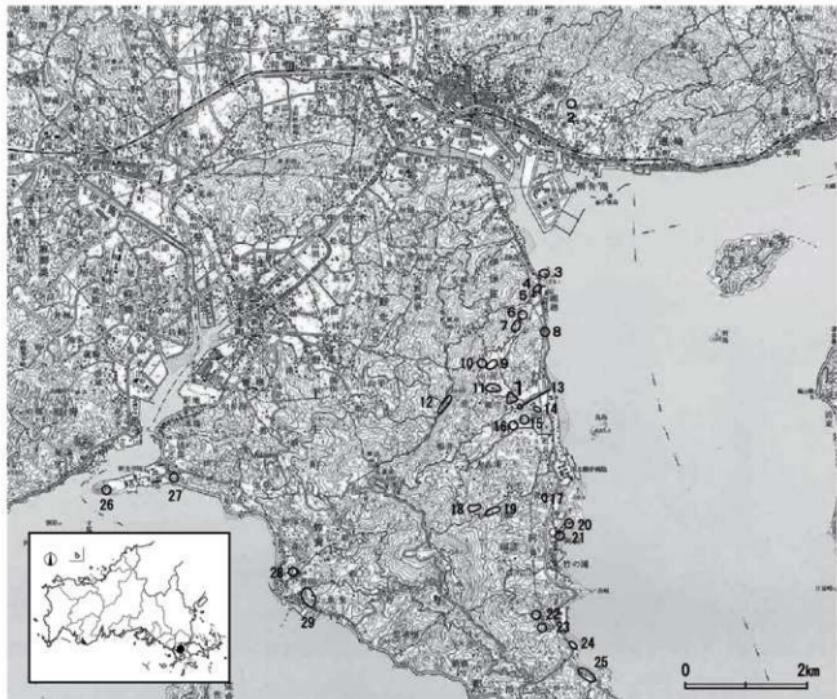
地区的平板測量を行った。25日からは前岡河内遺跡1地区の遺構の掘り込みを開始し、前岡河内遺跡2地区、追遺跡、明力遺跡の順に掘り込みを行った。この間、台風や豪雨、酷暑に見舞われたが、地道に作業を進め、8月9日には実機ヘリによる空中写真撮影を行った。その後、各地区の平面図作成を行い、29日には器材を撤収した。30日から調査区の埋め戻しを開始し、9月5日に全ての現地作業を完了した。13日には、伊保庄公民館で地元向けの発掘調査成果報告会を開催し、24名の来場があった。その後、埋蔵文化財センターにおいて、出土遺物や写真、図面の整理、遺物の写真撮影や原稿執筆等を行い、本報告書を刊行した。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡は、山口県の東南部、柳井市伊保庄に所在する。伊保庄は柳井市域の南部に位置し、瀬戸内海に突出する熊毛半島（室津半島）の北東部、半島基部寄りにある。行政的には南側が柳井市阿月、西側は熊毛郡平生町、北側は柳井市古開作に接する。

まず、熊毛半島は、大星山と皇座山を主峰とする北西から南東に約 13 km にわたってのびる半島で、東側は伊予灘、西側は周防灘に面する。半島北東部の地質は白亜紀の領家花崗岩類が大半を占め、一



- | | | | |
|---------------|-----------|----------|---------|
| 1 追・明力・前岡河内遺跡 | 2 柳井茶臼山古墳 | 3 黒島浜遺跡 | 4 宮田遺跡 |
| 5 上八古墳 | 6 貞政遺跡 | 7 中郷遺跡 | 8 大段石棺群 |
| 9 長宗遺跡 | 10 上峰遺跡 | 11 山近遺跡 | 12 吹越遺跡 |
| 13 向田遺跡 | 14 八幡山古墳群 | 15 立石遺跡 | 16 阿原遺跡 |
| 17 吉毛遺跡 | 18 平本遺跡 | 19 平佐遺跡 | 20 浦家墓所 |
| 21 克己堂 | 22 山添遺跡 | 23 妻崎古墳 | 24 湯原遺跡 |
| 25 与浦遺跡 | 26 阿多田古墳 | 27 神花山古墳 | 28 白鳥古墳 |
| 29 岩田遺跡 | | | |

第2図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

部地域に第四紀から第三紀にかけて輝石安山岩が噴出している。地形的には半島の背部が小起伏山地を成し、海岸沿いには小規模な沖積地や扇状地がみられるものの、大規模な平野はない。加えて、半島基部にある低地にはかつて古柳井水道（古熊毛水道）と呼ばれる海峡が存在している。

とくに伊保庄の地形は、北側から西側にかけて大星山などから続く山稜部が迫り、また南側には阿月丘陵があり、海岸部に小三角洲性低地が散在する。とくに今回の調査地は、背後の山地から東に張り出す丘陵の先端近くで、西北から流下する和田石川と箕山の東斜面から北東方向に流れる中村川が合流する付近であり、東側の眼下には海岸部へ向かって下降する河岸段丘がみられる。

2 歴史的環境

古柳井水道周辺および熊毛半島には多くの遺跡が分布している。縄文遺跡では半島西側に岩田遺跡があり、主に後期から晩期の土器は西部瀬戸内の土器編年の基準となっている。弥生時代では今回の調査地から南西側へ約22km離れた標高275m前後の山稜上に高地性集落として著名な吹越遺跡があり、後期末から古墳時代初頭の時期に比定される竪穴住居が9棟検出されている。古墳時代では古柳井水道の北東側の丘陵上に造営され、多数の副葬品を有した前期古墳の柳井茶臼山古墳、中期古墳では半島西側に位置する周防部最大の墳丘規模を誇る白鳥古墳や、小型前方後円墳の阿多田古墳、神花山古墳などが知られる。また、古代以降についても、丘陵部からその縁辺部を中心に集落遺跡や寺院跡、窯跡などが点在する。

とくに伊保庄内の遺跡については、主に現在の海岸部及び低丘陵部や丘陵先端部の緩斜面上に分布している。まず、旧石器時代の遺跡としては海岸部にある黒島浜遺跡があり、県内では数少ない国府型ナイフ形石器の素材となる翼状剥片が採取されている。縄文時代では同じ黒島浜遺跡や、宮田遺跡がある。とくに前者は県内では著名な縄文遺跡で、遺構は明らかでないが、前期から晩期までの各時期の土器が出土する。それらの中には中部瀬戸内系や九州系の土器が含まれており、当時の文化交流を考える上で注目されている。弥生時代では標高約80mの丘陵部にある上峰遺跡で中期頃の竪穴建物1棟の検出がある。また伊保庄南部に位置する向田遺跡では住居を確認していないが、前半期の溝、後期の土坑がある。古墳時代では前期まで遡る古墳は確認されていないが、中期古墳では海岸部の丘陵上に立地する大段石棺群（大段古墳群）があり、組合式箱式石棺を主体部とする小古墳である。また、後期古墳としては、丘陵部に上八古墳、八幡山古墳群があり、前者は横穴式石室を有する円墳で、耳環や玉類、土器類などが多数出土している。因みに、この古墳は大段古墳群の1基と共に現在、柳井南中学校内に移築復元されている。さらに古墳時代の集落跡としては向田遺跡があり、遺構の検出数は少ないものの4世紀末から5世紀初頭頃の竪穴建物1棟をはじめ、土坑、溝などがある。

古代以降に関しては、向田遺跡で奈良時代に比定する掘立柱建物や土坑、溝などが検出されている。とくに注目される遺構に銅精錬炉と推定するものや、畿内系土師器、墨書き土器、綠釉陶器などの遺物があり、周辺城に古代官衙の存在が推測できよう。また同遺跡では、室町時代から江戸時代の終わり頃までの墓も200基以上発見されている。さらに、今回の調査対象遺跡の1つである明力遺跡の既往発掘調査では、鎌倉時代の竪穴建物2棟が確認され、内、1棟は鍛冶に関わる工房であることが明らかになっており、平安時代後期から室町時代後半までの掘立柱建物も9棟検出されている。

III 調査の成果

1 追遺跡

(1) 調査区の概要

遺跡は、和田石川に向かって西側から張り出した丘陵の先端部分にあり、調査区の西側部分では花崗岩バイラン土からなる地山が検出される。調査区は一枚の耕地だが、東側の旧状は和田石川に向かって落ち込む斜面で、川沿いの現市道側に大きな石やコンクリート片で石垣状に土留めを行い、間を埋めて拡張している。調査区内には丘陵の張り出しと平行する南北方向の段差があり、以前にも丘陵の落ち際斜面に小規模な埋め立てを行い、耕地化したものと考えられる。南北方向に並ぶ石列は、その際の土留めとして設置されたものと推定される。そのためか、遺構が検出されたのは西側の地山部分のみであり、東側は急傾斜で川に向かって下り、客土が厚く危険なため、3か所のトレーンチを設定し、地山の落ち込み状況を確認することとした。

西側で検出された遺構は、5基の土坑、1条の溝のほか、柱穴群で、北部は地山が削平され遺構の残りが悪く、南部は比較的の残りが良かった。

丘陵上位側の南西部西壁の土層断面は、耕地化した中位より下部は、ほぼ傾斜に沿った自然堆積状況を示している。一方低位側の東壁及びトレーンチ2の土層断面は、多くの瓦礫を含む色調の異なる土が複雑に入り組み、重機等を用いて大規模な客土を行った様子がみてとれる。

(2) 遺構

近世以前の遺構は、調査区内西半部で検出した丘陵裾部の緩傾斜面、大小の花崗岩自然石を多く含む浅黃橙色の花崗岩バイラン土の地山面上にあり、土坑5基、溝1条、柱穴58個を検出した。遺構の深さは地山が後世に削平を受けているため、総じて浅い。また柱穴は径10~20cmの小さいものが多い。また密集した部分もあったが、組み合わせによる掘立柱建物等の復元はできなかった。

調査区東半部は現代の耕地拡張に伴って大規模に埋めた部分で、3か所にサブトレーンチを設定して掘り下げた結果、2か所で旧耕地に伴う簡素な石列遺構の一部を確認した。

以下、主な遺構について述べる。

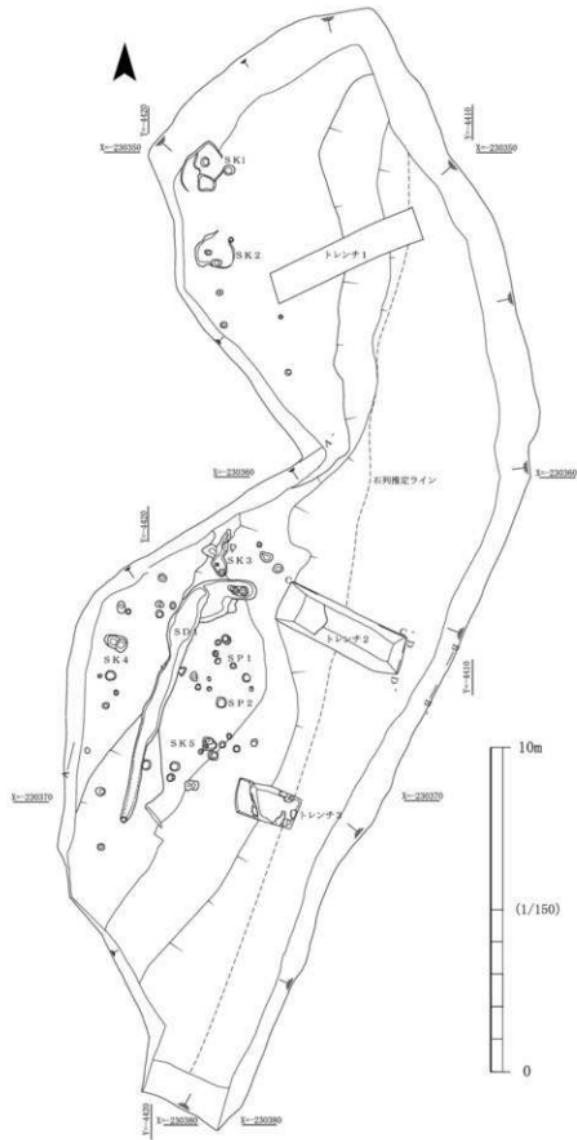
① 土坑

SK1 (第6図、図版5)

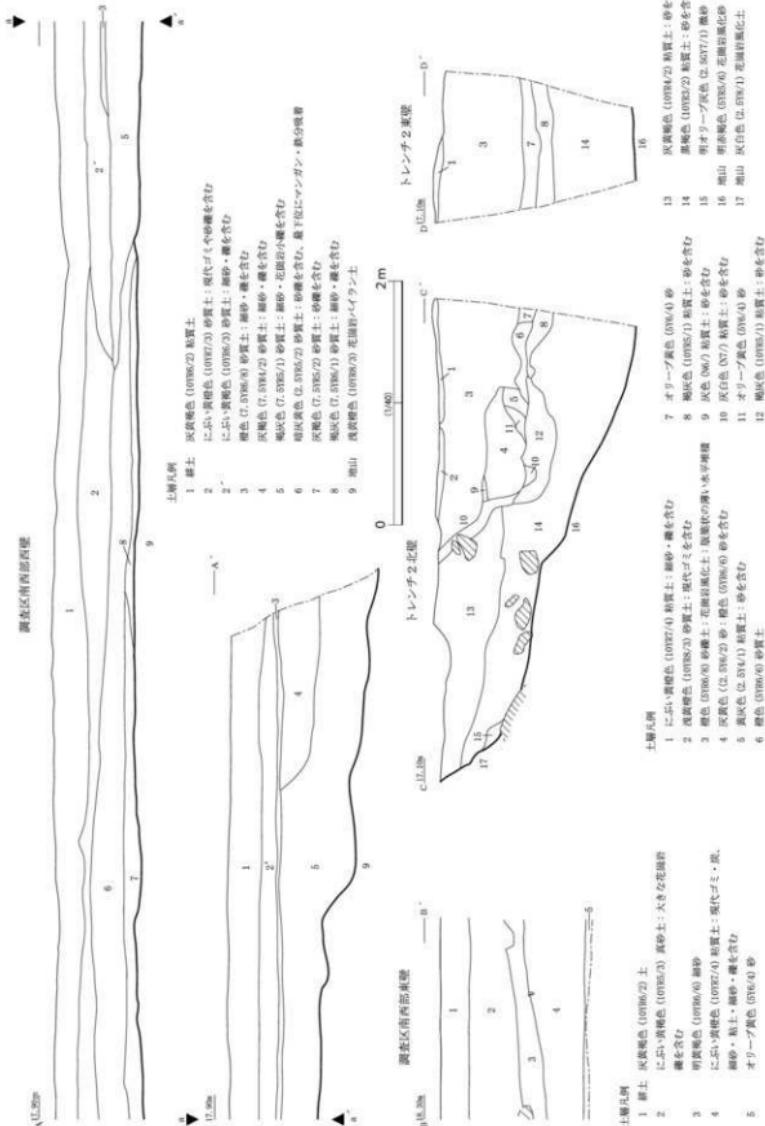
調査区北部西側に位置する。平面形は東西1.6m×南北1.1mの不整方形で、西側肩部は後世、大きく削平されている。埋土は暗赤褐色粘質土の単層で、深さ30cmを測り、底面は段を有する。中世の土師器杯片が出土した。また中央には径約28cm、深さ27cmの柱穴が存在するが、SK1に伴うものかは不明である。なお、肩部周縁にかけて2つの柱穴が切り合っているが、SK1との先後関係は確認できなかった。出土遺物に土師器片がある。

SK2 (図版5)

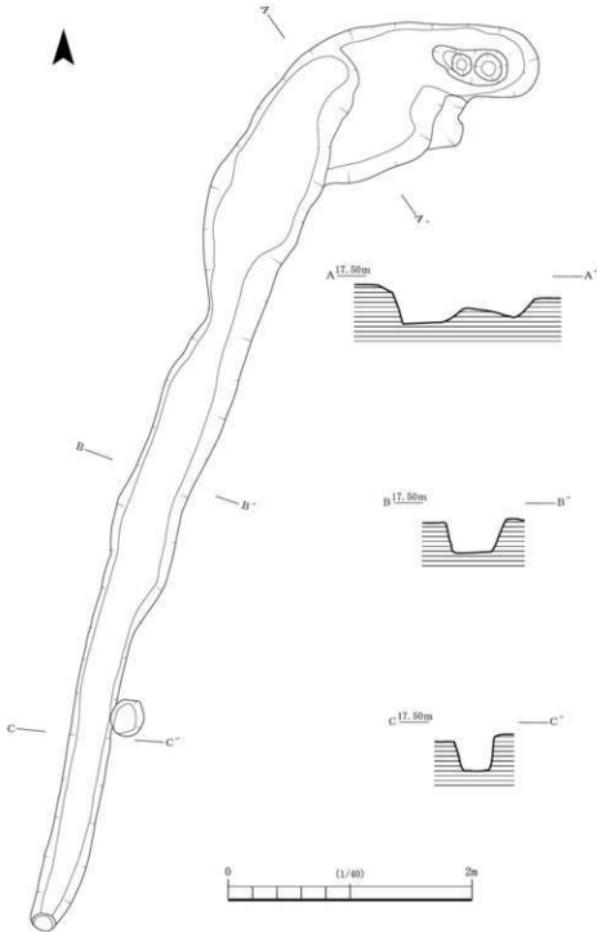
調査区北部西側、SK1の南側、約2m離れた地点に位置する。平面形は1.15m以上×1.0m以上の不整円形で、東側肩部は後世、大きく削平されている。埋土は暗褐色砂質土の単層で、深さは7cmを測り、平坦な底面を呈する。また内部から土師器片、須恵器片が出土した。なお、底面はかで3つの小柱穴を検出したが、位置関係からSK2に伴わない可能性が高い。



第3図 遺構配置図



第4図 調査区南西部西壁・東壁・トレンチ2北壁



第5図 SD 1 実測図

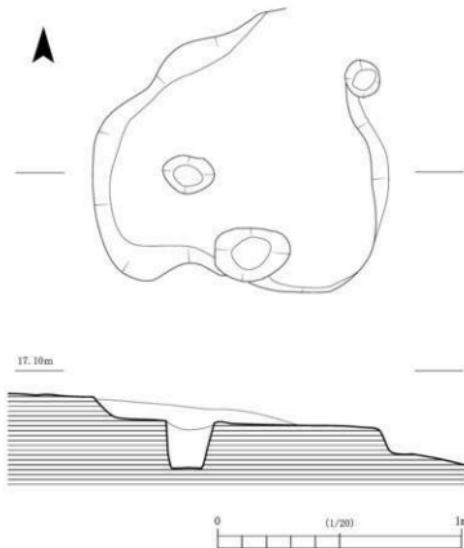
SK3

調査区南半部の地山落ち込み肩部付近にある。平面形は $0.45\text{m} \times 0.43\text{m}$ の不整隅丸方形で、深さは 25cm を測る。埋土は暗灰黄色砂質土の単層で、底面では 2 つの大小の柱穴を検出した。出土遺物は無い。

②溝

SD 1 (第5図、図版6)

調査区内南西部に位置する小溝で、全長 9.3m を測る。全長の約 7 割にあたる中央部から南側は南南西から北北東に比較的直線的にのびており、中央部で幅約 50cm、深さは 30cm 前後、南側端部近くでは幅 30cm、深さ 30cm である。床面は平坦で、灰黄褐色砂質土を埋土とする。また全長の約 3 割にあたる北側部分は平面主軸を大きく東に湾曲し、幅が広くなる屈曲部分では幅 130cm を測る。床面は段を有し、端部側が浅くなっている、深い部分では約 30cm を測る。埋土は中央部以南とは異なり、暗褐色粘質土である。水流方向は底面の高低差が北端部よりも南端部が約 27cm 高いことから、南から北へ、そして東の谷側に向かっていたと察せられる。溝内からの出土遺物には、中央部から南側で土師器、北側で土師器、鉄製品が出土した。いずれも小片で、土師器の時期は中世である。なお、最も北寄り端部の溝内床面から 2 つの径 20cm 前後の柱穴を検出した。溝との関連性は明らかでないが、SD 1 の埋土上面で切り合が確認できなかったことから、少なくとも溝の埋没後に掘り込まれたものではない。



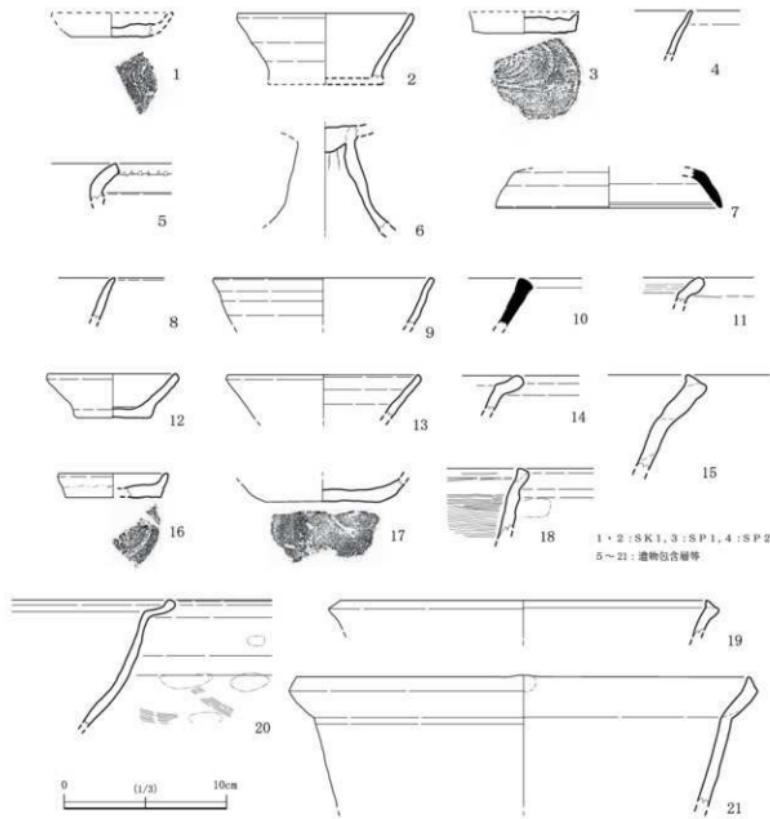
第6図 SK 1 実測図

(3) 遺物 (第7図、図版6)

遺物は比較的の少量であったが、弥生時代、古墳時代、中世の土器が出土した。土坑や柱穴に伴った遺物は4点出土している。

1・2はSK 1から出土した土師器皿、杯である。1の皿は、底部裏面に回転糸切り痕を有するとと思われる。2の杯は、体部外間に強い稜線を有し、極めて硬質である。3はSP 1から出土した回転糸切り痕を有する土師器皿の底部である。短い体部が厚い底部からほぼ垂直に立ち上がる。4はSP 2から出土した土師器杯または椀の口縁部である。極めて硬質である。いずれも中世の遺物である。

5～21は遺物包含層等から出土した。5は口唇部下端に浅い刻目、頭部に貼付突帯を有する弥生土器壺の口縁部である。6は赤色顔料が塗布された土師器高杯の脚部である。わずかに残る杯部の裏



第7図 出土遺物実測図

面は脚部内に突出する。7は内面端部に沈線が巡る須恵器の杯蓋である。8、9、13、17は土師器の杯である。9は内外面が浅黄橙色を呈しやや軟質である。13は極めて焼成がよく硬質である。12、16は底部裏面に回転糸切り痕を有する土師器の皿である。10は東播系須恵器の鉢である。11、14、20は土師質土器の鍋である。20は肩部に指ナデの棱線を有する東周防型の鍋で、外面に煤が付着している。15、18、19、21は瓦質土器の鍋である。15は外部全面に煤が顯著に付着している。18は内面に強いハケ目痕を有する。

第1表 出土遺物観察表

No.	桟回	回数	出土場所	器種	形態	法面 (cm)		地質	地成	色調 (内) (外)	主な測定 (内) (外)	備考	
						上口径 (復元値)	底面 (復元値)						
1	7	6	SK1	土師器	皿	-	(0.8)	-	やや粗	良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転糸切り	
2	7	6	SK1	土師器	杯	(10.8)	(4.1)	(7.0)	やや粗	良	にぶい褐色 褐色～にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	
3	7	6	SP1	土師器	皿	-	(1.3)	(6.4)	やや粗	良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	回転ナデ 回転糸切り	
4	7	6	SP2	土師器	杯	-	(2.7)	-	やや密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	
5	7	6	表土	陶土器	甕	-	(2.1)	-	粗	良	にぶい黃褐色 にぶい黃褐色	横ナデ 口端はナデ。下位はハケ目の後ナデ	口部に廻目 断面に輪付剪苔
6	7	6	トレンチ1 第1層 暗褐色粘質土	土師器	高杯	-	(6.5)	-	やや粗	良	にぶい褐色 褐色	ナデ 丁寧なナデ	赤褐色付
7	7	6	トレンチ2 右列外側下層	土師器	皿	(14.0)	(2.4)	-	やや密	良	灰褐色 灰褐色	回転ナデ 回転ナデ	口縁内側にへりによる 沈澱が落ちる
8	7	6	包装場	土師器	杯	-	(2.6)	-	やや粗	良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	
9	7	6	トレンチ2 暗褐色粘質土	土師器	杯	(11.6)	(3.0)	-	密	良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	
10	7	6	トレンチ1 第1層 暗褐色粘質土	土師器	杯	-	(3.0)	-	粗	良	灰褐色 灰褐色	横ナデ 横ナデ	東播系
11	7	6	調査区南半部 包装場	土師器	皿	-	(1.7)	-	やや粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目の後ナデ 内端に沿ったナデ。ヘラによる沈澱 か	
12	7	6	トレンチ2 右列内側下層	土師器	皿	(8.2)	2.7	4.6	やや粗	良	明赤褐色 明赤褐色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り	
13	7	6	表土	土師器	杯	(12.0)	(2.7)	-	やや粗	良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	
14	7	6	包装場	土師器	皿	-	(2.2)	-	密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ 横ナデ	
15	7	6	トレンチ2 右列内側下層	瓦質土器	皿	-	(5.8)	-	やや粗	やや良	灰褐色 灰褐色	横ナデ 横ナデ	外面全面に塗付着
16	7	6	包装場	土師器	皿	(6.8)	1.4	(5.9)	やや粗	良	にぶい褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り	
17	7	6	表土	土師器	杯	-	(2.1)	(2.0)	密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ	
18	7	6	トレンチ2 黒灰色粘質土	瓦質土器	皿	(21.0)	(4.4)	-	密	良	灰褐色 灰褐色	ハケ目の後ナデ、強いハケ目 横ナデ、オサエナデ、抱オサエ	
19	7	6	トレンチ2 右列内側下層	瓦質土器	皿	(24.0)	(2.3)	-	粗	良	灰褐色 暗灰褐色	横ナデ 横ナデ	
20	7	6	トレンチ2 黒灰色粘質土	土師器	皿	-	(7.8)	-	やや粗	良	灰褐色 暗灰褐色	抱オサエ、ハケ目の後ナデ 抱オサエ、オサエナデ、ハケ目の後、外面に塗付着 ナデ	外面に部分的に塗付着
21	7	6	調査区南半部 包装場	瓦質土器	皿	(28.0)	(8.5)	-	やや粗	やや良	灰褐色 灰褐色	横ナデ 横ナデ、底部ヘラによるナデ	外面に部分的に塗付着

2 明力遺跡

(1) 調査区の概要

調査区は和田石川が形成した谷間にあたり、南を流れる川に向かって下る傾斜地に立地する。ぐりかえし流入した土石流による堆積土上を整地し、耕地化されている。この土石流による堆積土中には弥生時代～中世までの土器片等を包含している。

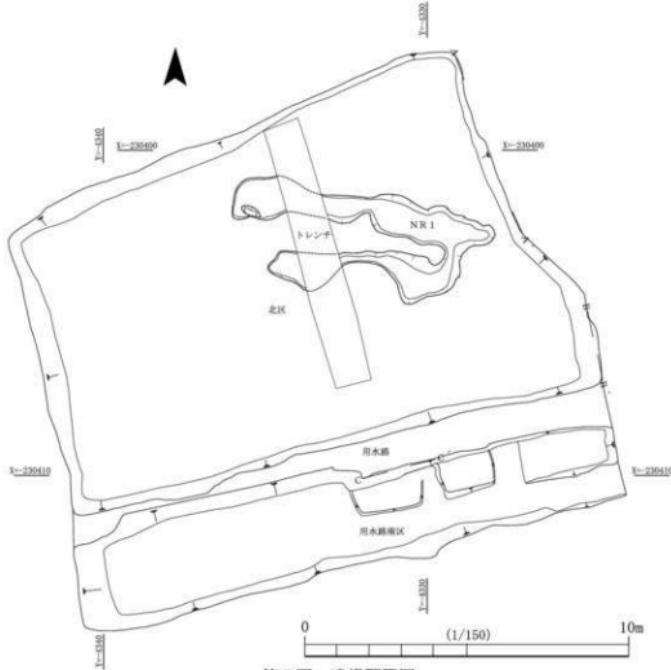
現耕作面から1m強下の明黄褐色粗砂からなる土石流堆積面では、湿地帯（NR 1）が検出された。自然にできたくぼみが湿地帯となったとみられ、黒褐色のシルト中から、オニグルミなどの種実や小枝などが検出された。共伴する土器片は数が少ないが、高杯脚部やタタキ痕のある壺破片等が2点みられ、古墳時代頃埋没した可能性が高い。一方、後載する種子や土器片付着の煤の放射性炭素年代測定結果は、縄文時代早期の値を示している。

(2) 遺構

今回の調査では人為的な遺構の検出は無かったが、調査区内の北東寄りの部分において、丘陵裾部から緩傾斜する浅黄橙色花崗岩バイラン土の土石流堆積土面上で、多量の植物遺体等を含む堆積土を埋土とする湿地帯（NR 1）を検出した。

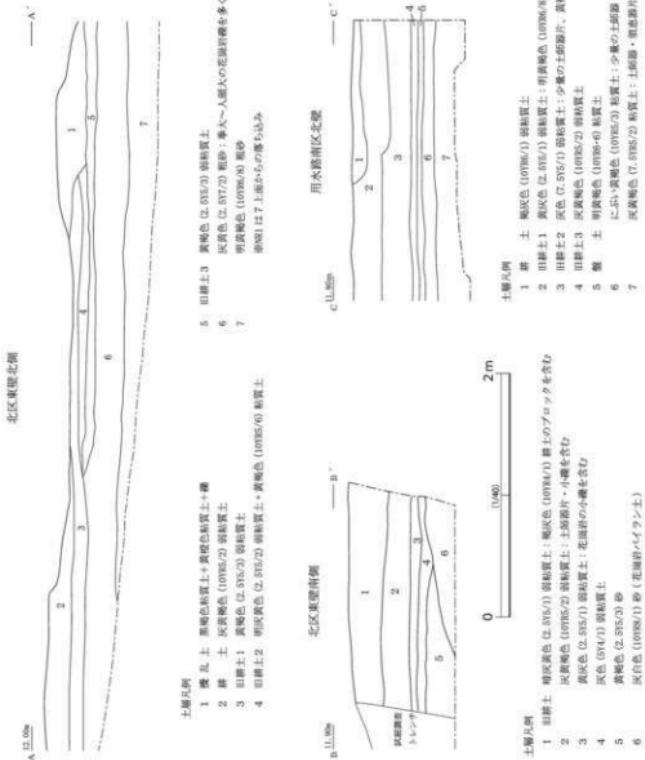
NR 1 (第10図、図版7)

東西に沿ってのびる二条の溝状の窪みで、東端では接続する。いずれも肩幅は一様ではなく、部



第8図 遺構配置図

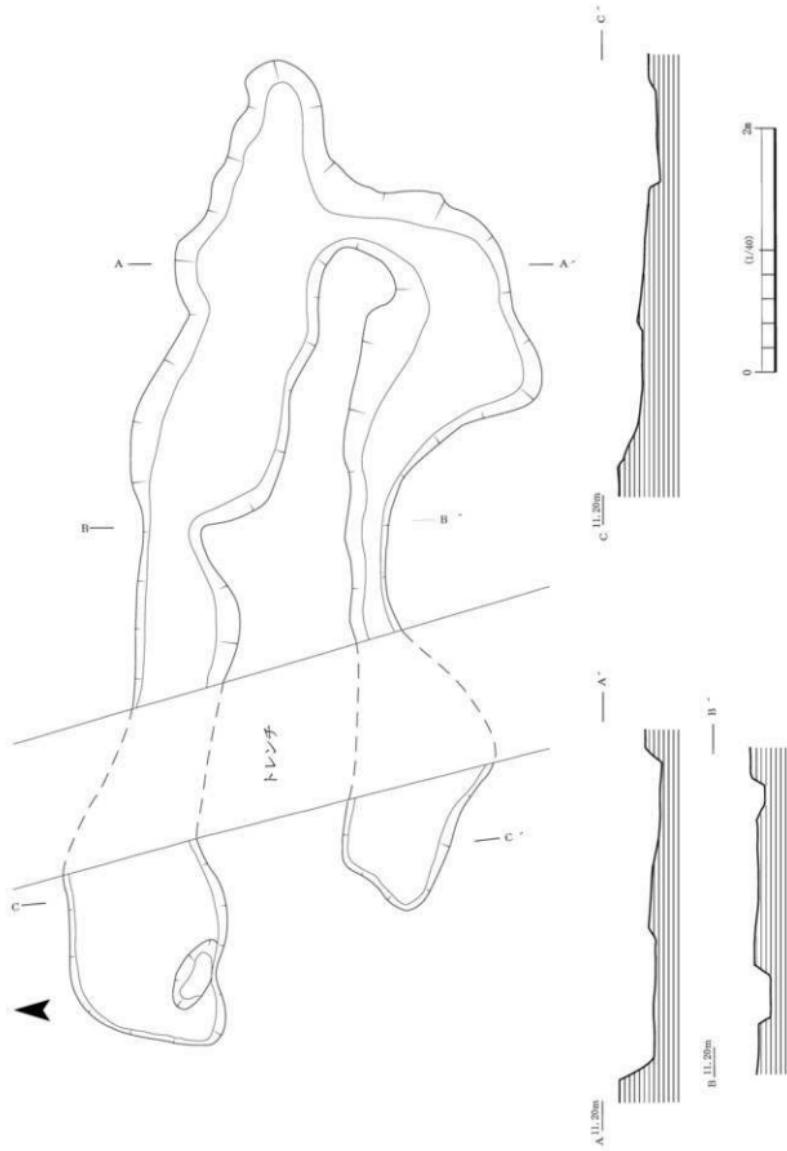
第9図 北区東壁北側・南側、用水路南区北壁土層断面図



分的に広狭がある。標高上位にある北寄りの溝状の窪みは、全長8.1m、幅は1.25~0.47mである。深さ10数cmで、底は西側で浅いU字形を呈するが、中央から東側にかけては平坦である。下位南寄りの窪みは全長5.9m、幅は0.28~1.55mである。深さは中央で0.1mを測り、西端に至るほど浅くなる。また東端の接続部分は、幅0.5m、深さ10cm以下で非常に浅い。

NR 1は自然発生により生成したものと考えるが、全体的に浅いこと、また本遺構の上面を覆う砂礫層の状況観察から、後世、土石流等の自然要因でかなり削平を受けていると推定できる。そのため、今回の検出部分は本来の底面の一部であろう。

第10図 NR1実測図



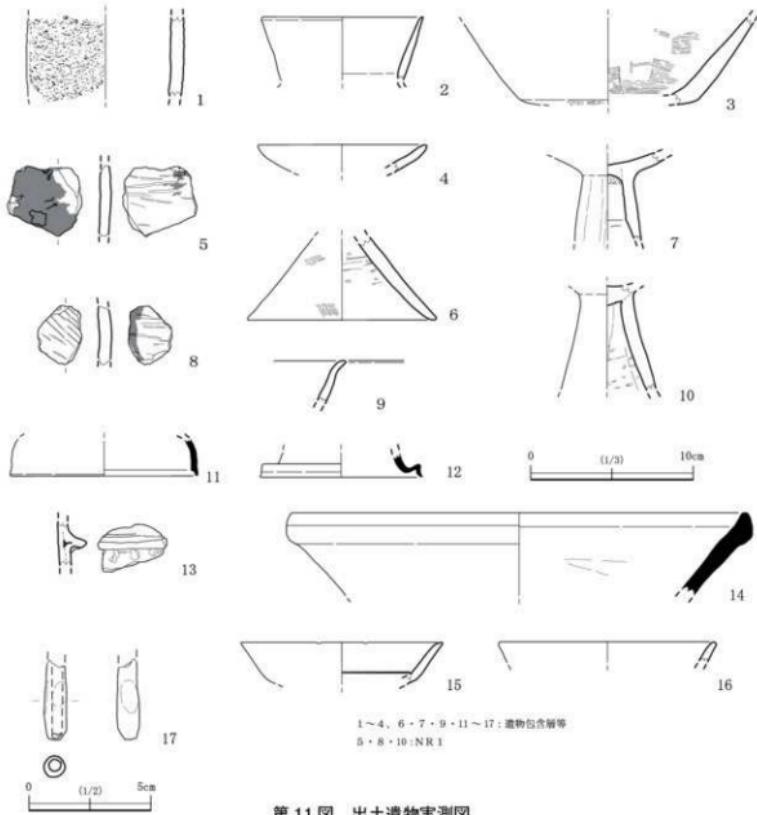
出土遺物には、埋土である黒色・黒褐色の粘質土内から、自然木の小枝やオニグルミ、ナラガシワ、オガタマノキ、ブドウ属、クマノミズキ、ハクウンボク等の種実を含む多数の植物遺体があり、土器片も3点が出土した。中には炭化した自然木や炭化物の付着した土器も含まれる。

(3) 遺物 (第 11 図、図版8)

遺物は比較的小量であったが、弥生時代、古墳時代、中世の土器が出土した。NR 1 に伴う遺物は 3 点出土している。

5・8・10 は NR 1 から出土。5・8 は土師器の甕である。いずれも外面にタタキ痕を有する。5 は内面に炭化物が付着している。小片のため断定はできないが、古墳時代前半のものである可能性が高い。10 は土師器高杯の脚部である。脚部は裾に向かって緩やかに開き、杯との接合部は円盤充填である。外面はナデによってハケ目を消している。

1～4・6・7・9・11～17 は遺物包含層等から出土した。1 は弥生時代後期の長頸壺の頸部とみられる。外面のほぼ全面に櫛描波状文を施している。2 は土師器壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて直線的に外反し、端部はやや尖り気味である。3 は土師器の高杯である。3 は杯部で、屈折部から直線的に開きながら口縁部に向かって立ち上がる。6 は小型高杯の脚部とみられ、



第 11 図 出土遺物実測図

裾に向かって直線的に開き、端部はややすばまる。7は杯部下半から脚部、脚部は細身であり、杯部との接合部は円板充填。4は畿内型の土師器小型器台の受け部とみられ、口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸味をもつ。9は土師器の鉢あるいは高杯の杯部とみられ、口縁部は外反し端部は丸味をもつ。11・12は須恵器である。11は径が小さいことから小型壺の蓋とみられる。口縁部内側に段を有し、体部は弧状に内湾し立ち上がる。12は高杯の裾部である。裾部は外上方へ屈曲した後、下方へ屈折し、端部はやや外側に開く。13は伊予系の土師質の羽釜で、鈎部はやや下向きに貼り付けられ、端部は丸味をもつ。鈎部の外面下側に連続する押圧痕が残る。14は東播系須恵器の鉢である。口縁部は肥厚し上端部は丸味をもつ。15は輪花型の白磁の皿である。16は青磁の碗である。17は土師質の管状土錐である。比較的細身で、孔は中央からやや偏って穿たれている。

第2表 出土遺物観察表

No.	種類	国名	出土場所	器種	基形	法寸 (cm)			焼成	色調 (内) (外)	主な調査 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底面 (復元値)	底径 (復元値)				
1	11	8	黒色砂質土層	須恵器	長脚壺	-	(4.8)	-	やや粗	良 灰黄褐色 灰赤褐色	胎オサエ、ナデ 胎オサエ、ナデ	縦横波状文か
2	11	8	遺構面	土師器	壺	-	(3.8)	-	審	やや良 灰褐色 に、ぶい黄褐色	ハケ目の後丁寧なナデ ハケ目の後丁寧なナデ	
3	11	8	表土	土師器	高杯	-	(5.3)	(11.0)	やや粗	良 赤褐色 灰褐色	ハケ目の後ナデ ハケ目の後丁寧なナデ	
4	11	8	遺構面	土師器	器台	(10.4)	(17)	-	やや粗	やや良 灰赤褐色 灰赤褐色	ナデ 丁寧なナデ	
5	11	8	N式1 黒褐色粘土質	土師器	壺	-	(4.4)	-	やや粗	良 黑色 灰黄褐色	胎オサエ、ナデ 胎オサエ、ナデの後タキ	内面に炭化物付着
6	11	8	調査区南側 包合層	土師器	高杯	-	(5.0)	-	やや粗	良 に、ぶい褐色	左方向のヘタ振り、下部は円周に沿ったナデ 胎オサエ、ハケ目の後丁寧なナデ	
7	11	8	表土	土師器	高杯	-	(5.4)	-	やや粗	やや良 に、ぶい黄褐色 に、ぶい黄褐色	下方向のナデ、瓶部左方向のケズリ 下方向のケズリの後右方向のナデか	
8	11	8	N式1 黒褐色粘土質	土師器	壺	-	(3.6)	-	粗い	やや良 暗灰褐色 暗灰褐色	胎オサエ、ナデの後ハケ目 胎オサエ、ナデの後タキ	外面に炭化物付着
9	11	8	表土	土師器	跡or高杯	-	(2.6)	-	審	良 に、ぶい褐色 に、ぶい褐色	凹間に沿ったナデ 凹間に沿ったナデ	
10	11	8	N式1 黒褐色粘土質	土師器	高杯	-	(6.5)	-	審	良 に、ぶい赤褐色	ケズリのナデ ハケ目の後ナデ	
11	11	8	包合層	須恵器	壺	(11.6)	(22)	-	やや審	良 灰色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
12	11	8	表様	須恵器	高杯	-	(12)	-	やや審	良 灰色 灰色	回転ナデ、ヘラナデ 回転ナデ	
13	11	8	包合層	土師器	羽釜	-	(2.7)	-	やや粗	良 に、ぶい黄褐色 灰黄褐色	ナデ 凹間に沿ったナデ、溝下は強い胎オサエの後ナデ	
14	11	8	包合層	須恵器	鉢	(28.0)	(50)	-	粗い	良 灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	東播系 神出窯か
15	11	8	調査区南側 包合層	白磁	皿	(124)	(26)	-	粗い	良 灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	ヘラによる光輝 輪花型
16	11	8	表様	青磁	碗	(33.4)	(12)	-	繊密	良 灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
17	11	8	調査区南側 包合層	土製品	土錐	-	(3.2)	-	やや審	良 に、ぶい黄褐色 に、ぶい黄褐色	胎オサエの後ナデ 胎オサエの後ナデ	管状 孔径 0.45cm

3 前岡河内遺跡

1) 1地区

(1) 調査区の概要

前岡河内遺跡は、西方に聳える大星山から東方の海岸部に向かって下降する舌状丘陵の先端部付近に位置する。1地区はその丘陵端部の北縁にあたり、小河川の和田石川の右岸に接する地点、標高約12.5mの旧宅地敷地面下にある。前出の明力遺跡の調査地とは和田石川を挟んで対峙する場所にあり、両間は最短で約10mの距離にある。

今回の前岡河内遺跡1地区的調査では、溝3条、土坑1基、落ち込み遺構を検出した（第12図）。溝（SD1～3）は3条並行するもので、性格は不明であるが、落ち込み遺構（SX1）に隣接しており、関連性があると推測される。

調査地内の北半部を占める落ち込み（SX1）は、調査区北を東西方向へ貫流する和田石川に向かって緩やかに下っており、旧地形においてはその右岸法面を形成していたと推察できる。そのため、落ち込みの肩部直下で検出した多数の遺物は、その出土状況から不用となって投棄されたと憶測される。また、本遺構は绳文時代から長期間わたって存在したものである。

土坑（SK1）は、遺構の東部分が調査区外に至るために全様を掴めないが、内部から古墳時代の土器類が多数検出された。それらの土器は検出状況より、SX1の遺物と同様、人為的廃棄、或いは流れ込みの可能性が高い。また、大半の土器は床面から浮いた地点での検出のため、SK1の造作直後に入ったものではない。なお、本遺構を本稿では土坑として扱ったが、場合によっては調査区外東側に向かって降下する丘陵落ち込み端部の一部であることも推察される。また本遺構の埋没時期は古墳時代後期である。

基本層序は、東壁面西側で観察すると、上から整地土・客土（現代）→耕作土（現代）→盤土（床土：現代）→自然堆積土等（古墳時代以前）→地山（花崗岩表層風化砂質土：バイラン土）である。ただし、調査区内西南側と東北側では大きく異なり、西南側では客土直下は地山で、新しい時代に地山上面まで大きく削平をうけている。

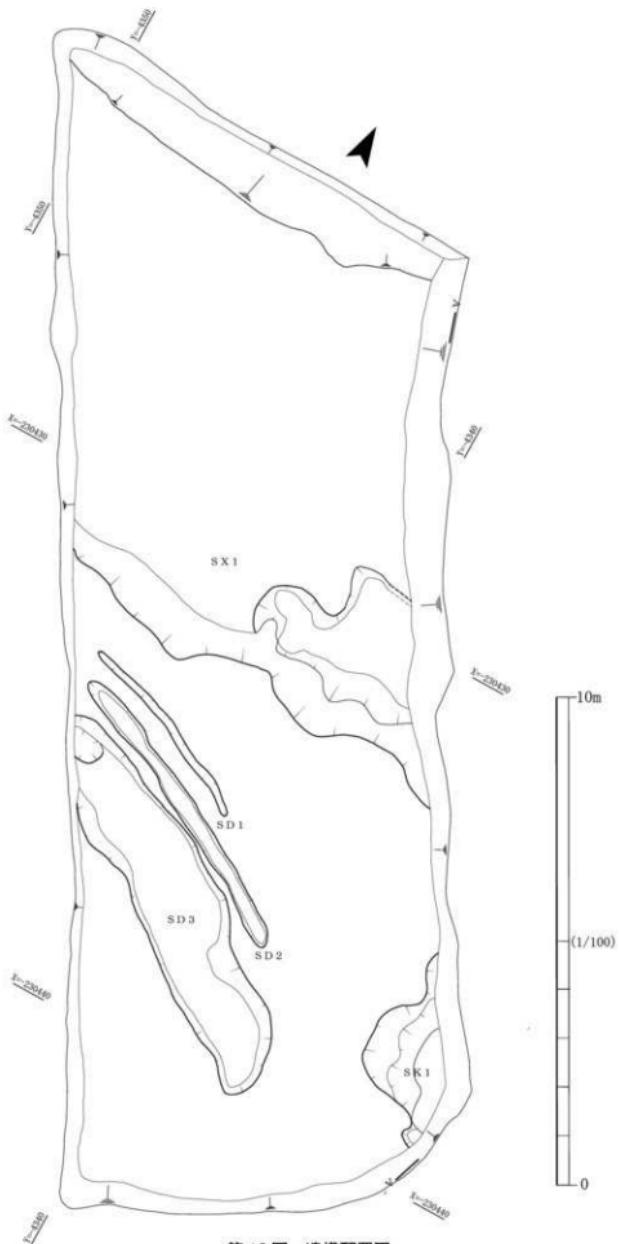
東壁面（第13図 図版9）での1層は現代の整地土（客土）で、近年まで存在した民家宅地の造成に伴う盛り土であり、その厚さは東南端で約0.4m、西側で1m近くを測る。2層・4層は旧耕土で、5層はその盤土と考えられる。6層～29層は遺物の包含を伴う自然堆積土および遺構内埋土で、特に15層～19層は多くの礫を含む。

(2) 遺構

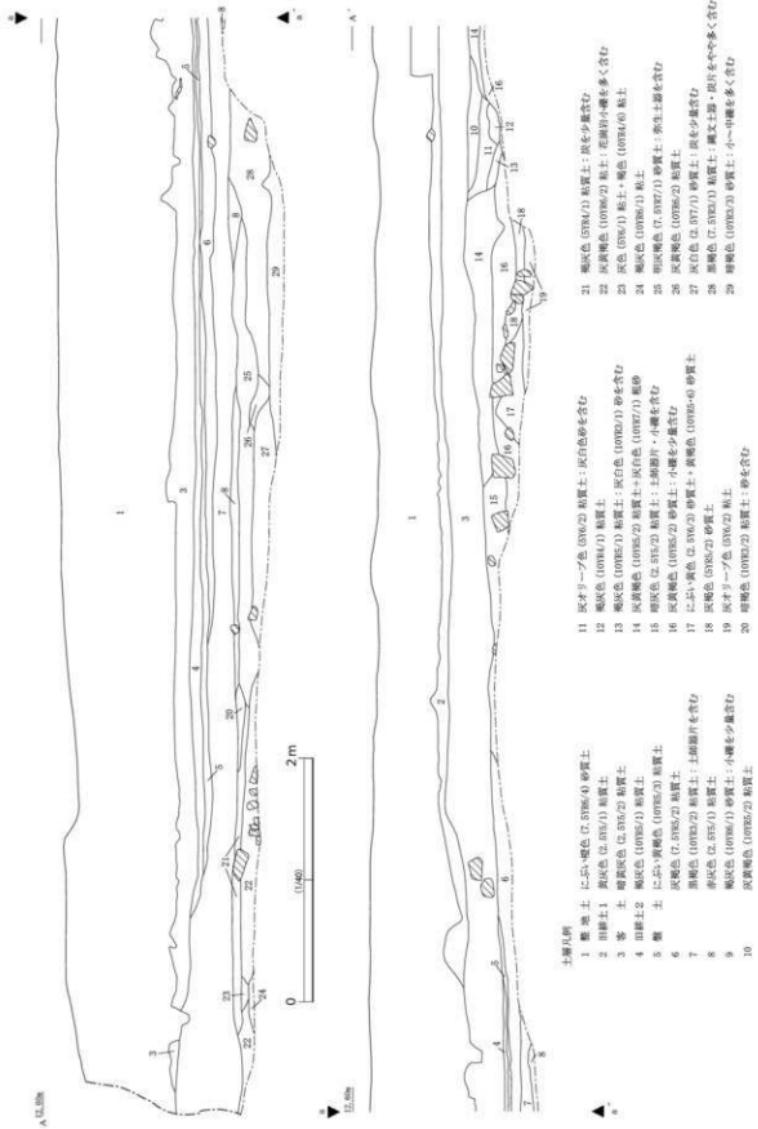
遺構として、溝3条、土坑1基、落ち込み遺構1があり、いずれも花崗岩バイラン土の地山上面で検出した。以下、個別に説明する。

①溝（第17図、図版11）

溝は3条あり、全て地山の標高が高い南東部分に位置する。3条共並列し、いずれも北西～南西にのびる。また、いずれも後世の上部削平により、非常に浅い状態で検出されたが、土師器片が少量出土した。なお、溝3条は同時期に存在したものと考える。また、溝は隣接する落ち込み遺構（SX1）と肩部ラインの方向に共通性があり、两者には関連性があると考えられる。



第12図 遺構配置図



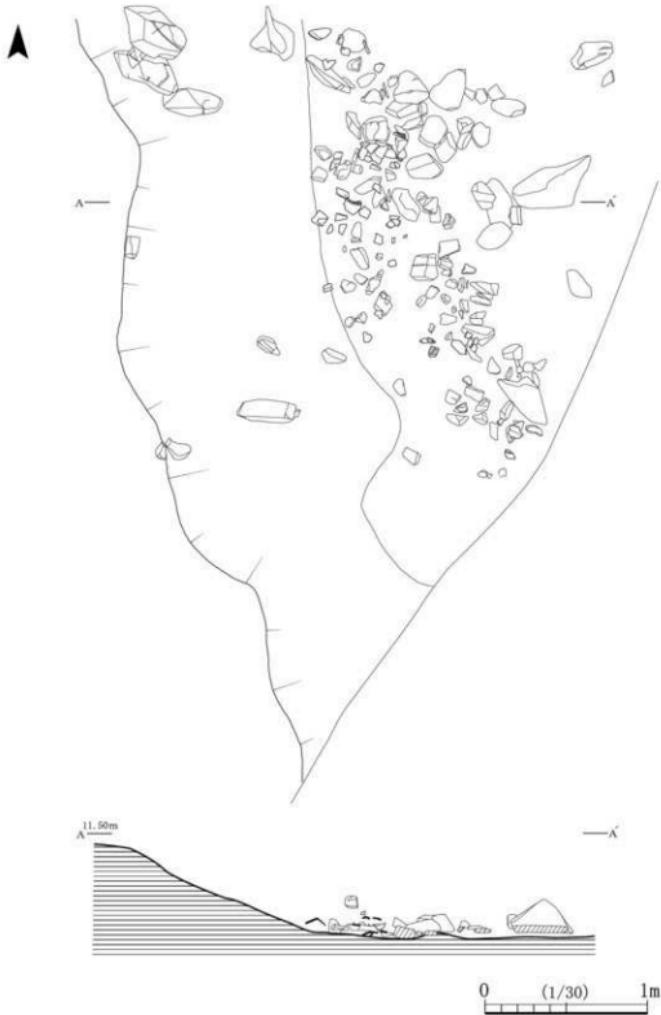
第13図 調査区東壁土層断面図

SD 1

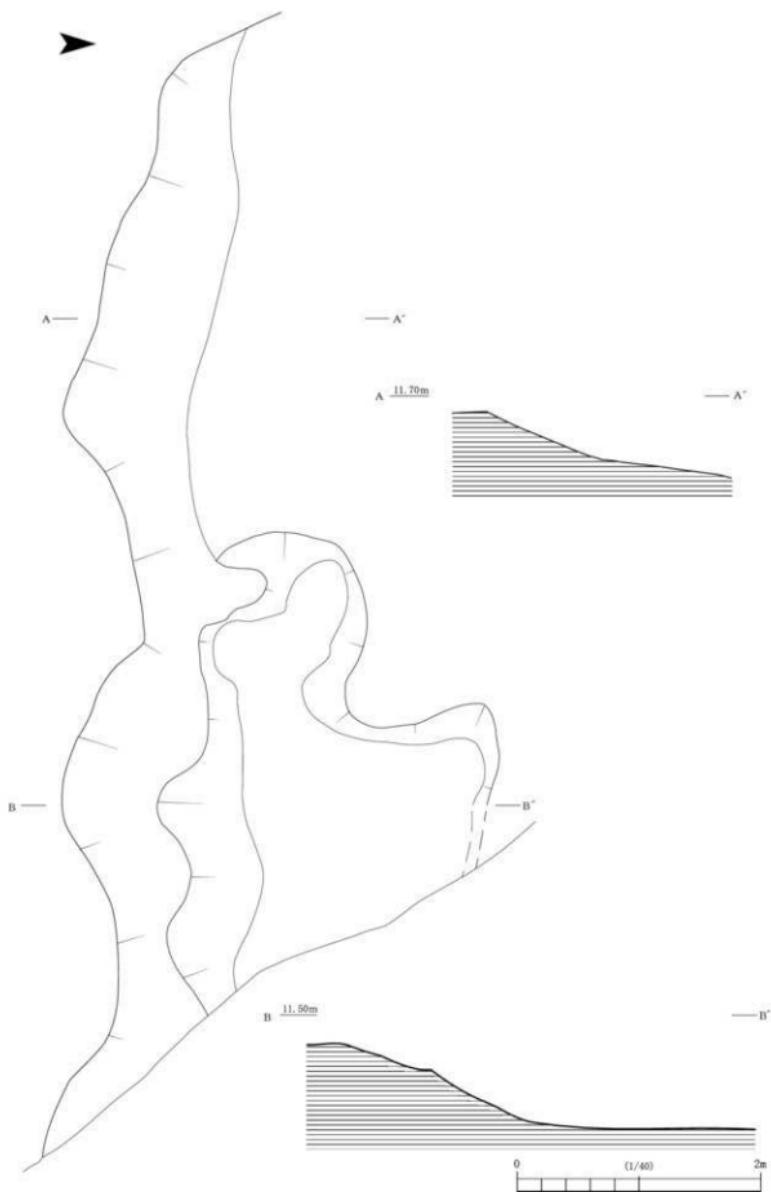
最も北寄りに位置する小溝で、検出範囲の中央部で湾曲する。長さ4.26m、幅0.2m、深さ1cmを測る。
埋土は暗灰黄色砂質土の単層である。土師器片が出土。

SD 2

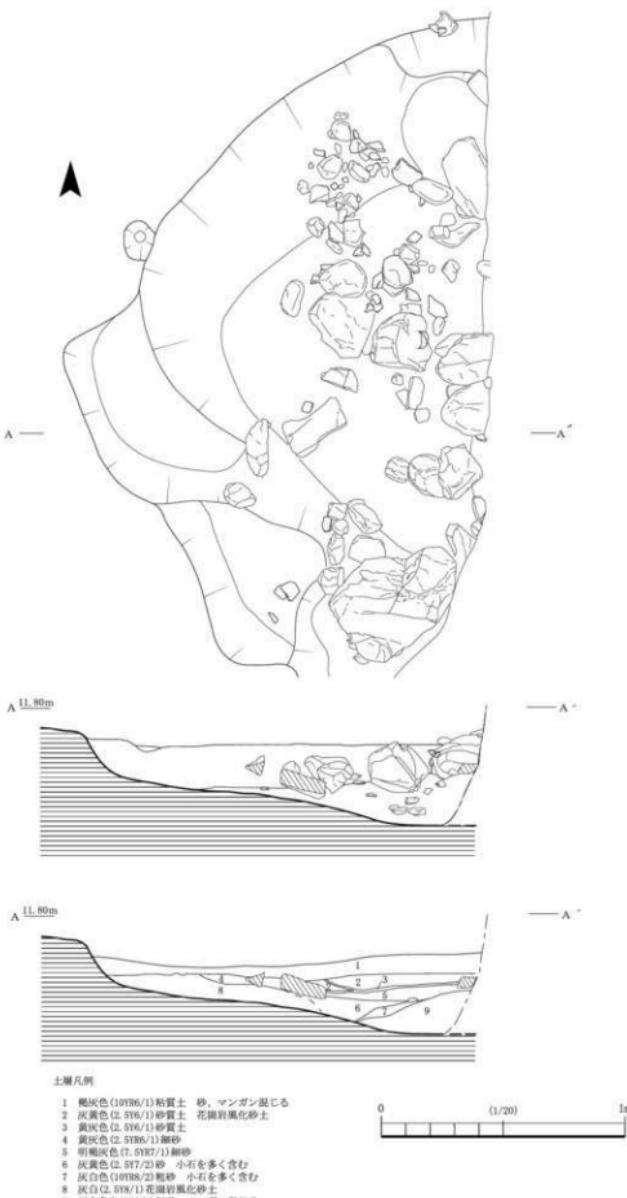
SD 1とSD 3の間に位置する小溝であり、肩部ラインは比較的直線的にのびる。長さ6.62m、幅0.52m、
深さ6.5cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質土の単層である。土師器片が出土。



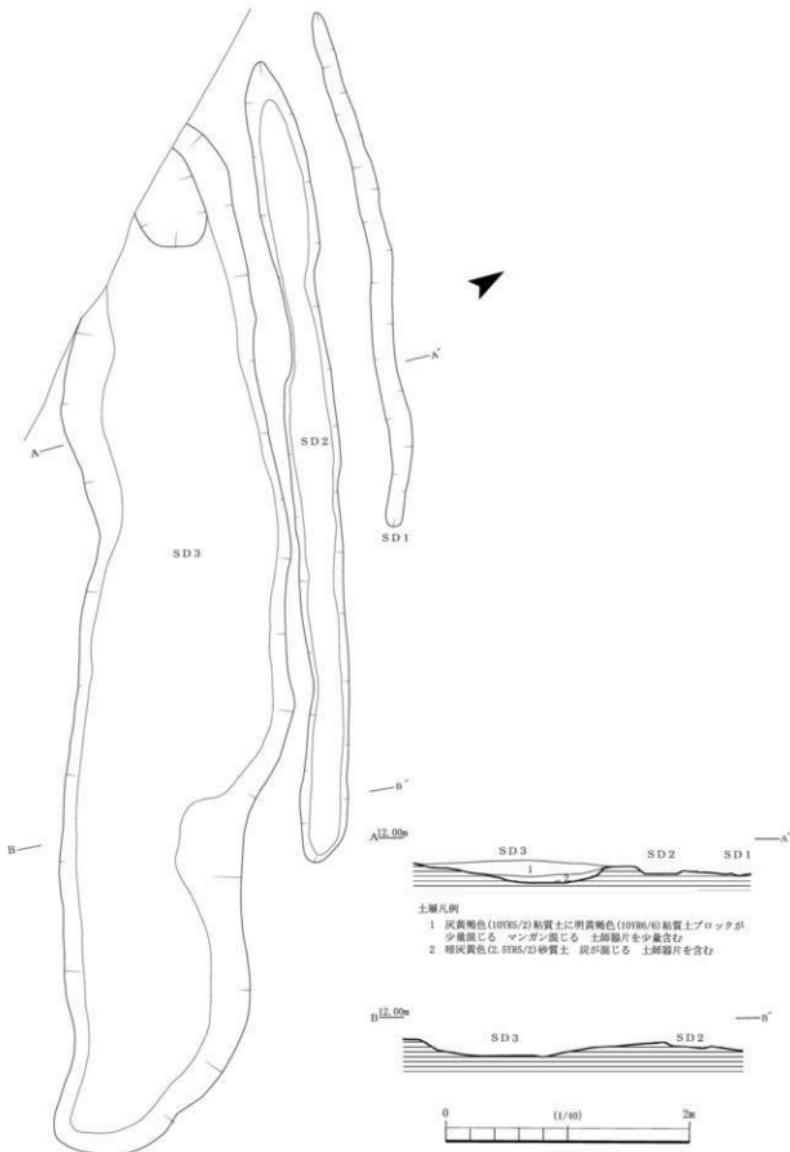
第14図 SX 1縄文土器・礫出土状況実測図



第15図 SX1南部実測図



第16図 SK 1実測図



第17図 SD 1・2・3実測図

S D 3

最も西南側に位置するもので、溝3条の中では一番幅が大きい。一端は西壁の調査区外におよんでいるが、南東側は削平で消失する。長さ8.5m以上、幅1.8m、深さ約20cmを測る。埋土は少なくとも2層に分かれ、上位は明黄褐色粘質土をブロックで少量混入する灰黄褐色粘質土で、下位は炭を少量含む暗灰黄色砂質土・シルトである。両層とも土師器を含む。

②土坑

S K 1 (第16図 図版10)

調査区内東隅に位置し、一部、調査区外におよんでいる。検出範囲内での長さは約3m、幅約1.6m、深さ最大約40cmを測る。埋土は少なくとも9層あり、上位の褐灰色粘質土は比較的厚くかつ広く覆うが、それ以下は砂層が多く、複雑な堆積状況を示す。

遺物は多数の大小の自然石と共に散在する。大半は土師器で、須恵器も1片あり、内部床面から上位までの層に含まれる。とくに土坑内北半部において、床面より数cmから10cm上で多数検出された。なお、S K 1は古墳時代後期には埋没したと推察できる。前述したが、本遺構は調査区外東側に向かって降下する丘陵落ち込み端部の可能性もある。

③落ち込み遺構

S X 1 (第14・15図、図版11・12)

調査区中央部から北半を占める範囲で検出した落ち込み遺構である。肩部上端ラインは北西—南西の方向に波状的に湾曲しながらのびる。両端共に調査区外におよんでおり、規模の大きな遺構と推定される。現状での肩部の長さは約9mで、深さは最大約70cmを測る。法面は緩やかに下降し、床面は南東端部の法面直下において、一部、3.3m以上×幅2.8m、深さ30cm前後の窪みを有するが、全体的には総じて平坦である。遺構の埋土は東側壁面で観察すると、20層以上におよぶことが認められ、中にはシルト層が縞状を呈するところもあり、このことは長期的にわたって堆積していくことを示す。ただし、花崗岩の角礫を多量に包含するシルト層や、小石を含む粘質土層などがあり、また一部で抉られた状況を窺わせる部分もあるため、必ずしも安定的に堆積していくわけではなかったことが察せられる。なお、縄文時代の遺物を含む黒褐色粘質土層は法面から広がっており、その直上には弥生時代の遺物を含む明褐灰色砂質土の堆積があることも確認できた。

遺物はとくに調査区中央部東側にあたる法面上やその直下の窪み上位から、縄文土器、石器、弥生土器が出土し、とくに縄文時代の遺物は一部、纏まとった状態で検出された(第14図)。ただし、遺物は床面に接しているものは少なく、埋土層中から検出したものがほとんどを占めた。なお、出土した土器類は磨耗が少ないため、人為的に投棄された蓋然性が高い。

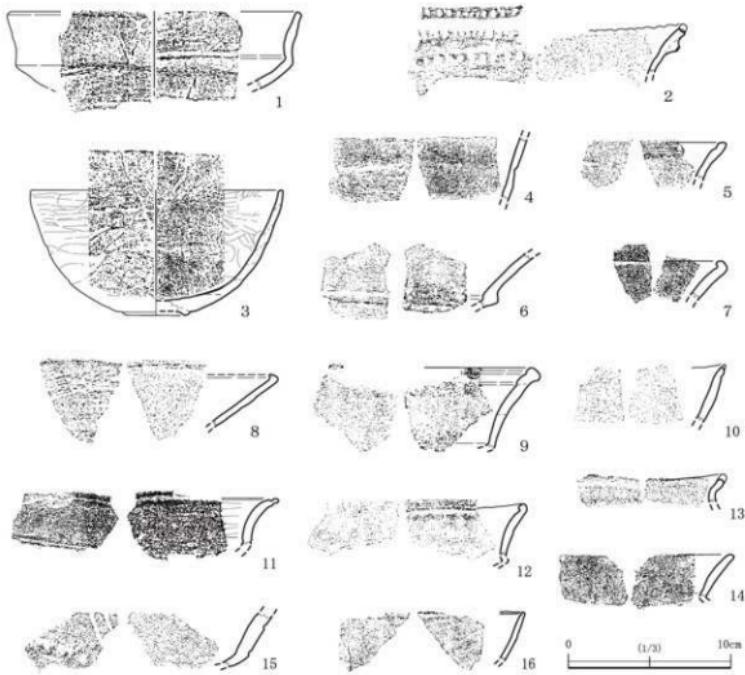
いずれにしても本遺構は少なくとも縄文時代から長期間にわたり存在したもので、以後、S D 1～3の高さまで埋没するのは、その溝との関係性を考えれば、古代以後と推察できる。

(3) 遺物 (第18～23図、図版13～16)

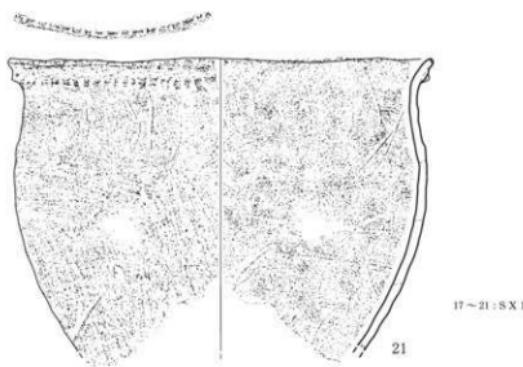
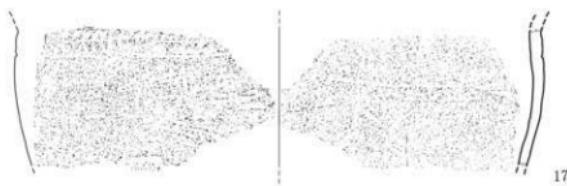
1～46、65・82は縄文土器である。1～46・82はS X 1、65は遺物包含層出土。1～16、22は浅鉢である。1は口縁部が緩やかに湾曲して外反し、端部は面取りしている。肩部で屈折し胴部は内

湾気味にすばまる。精製土器で内面は丁寧に研磨されている。3は上げ底の小さな底部から半球形の胴部が立ち上がり、口縁部はやや内湾気味で端部は面をもち、粘土帯の積み上げ痕が残る。胴部中位外面には、幅広の沈線が巡る。7は精製土器で、口縁端部を内側に肥厚させる。9は外反する口縁部がしだいに厚みを増し、端部付近を肥厚させ、肥厚帯の上に沈線を1条施している。13は口縁部が短く、胴部以下を欠失するが、強く屈折するタイプとみられる。15は屈折部外面に刻目、肩部に山形とみられる斜行沈線文を引く。16は精製黒色磨研土器の浅鉢でボール状を呈し、口縁部は細くなり、内面に1条の沈線を巡らす。胎土には雲母が目立つ。22は波状口縁で、胴部で屈折して口縁部が大きく外反する。器面調整はヘラミガキが主体だが、外面屈折部以下は二枚貝条痕のままである。

17～21、23～40は深鉢である。器面調整は、粗い二枚貝条痕やケズリ、ナデのものが多い。17は胴部上位に連続する爪形文を施文後、横方向に沈線を施している。18～21・23～30・32・35・36は突帯文土器で、18・19・21・23・24・26・28は口縁端部と断面三角形の突带上に刻目をもつ。23・32の刻目はヘラ状工具によるD字状の刻目、36は棒状工具によるO字状の刻目。18～20は胴上部から外反する口縁をもち、20・21は胴部中位が大きく張る。31・33・38は口縁端部に刻目をもつ。32は波状口縁で、刻目突帶も口縁部下に波状に貼付されており、方形浅鉢の可能性もある。34は屈折部に3条の凹線を施す。37・39・40は頸部に山形状の斜行沈線文を引く。37は上部に突帶の痕跡



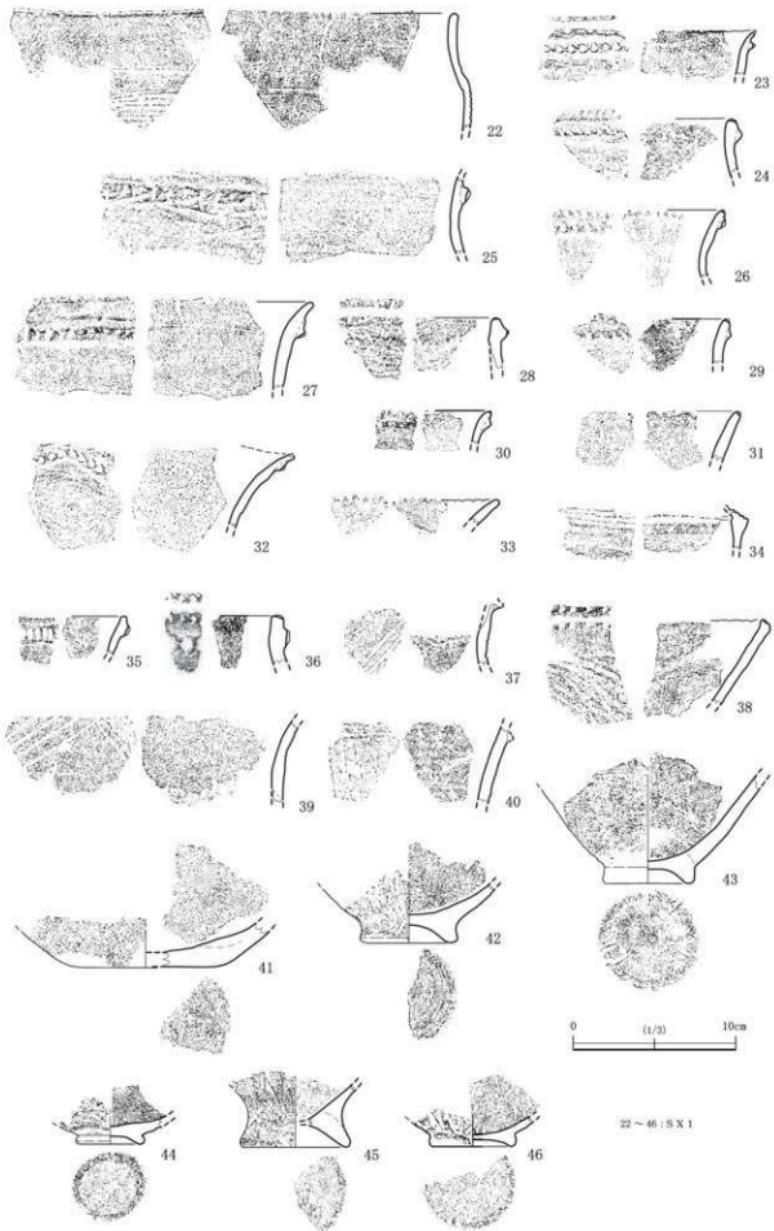
第18図 出土遺物実測図①



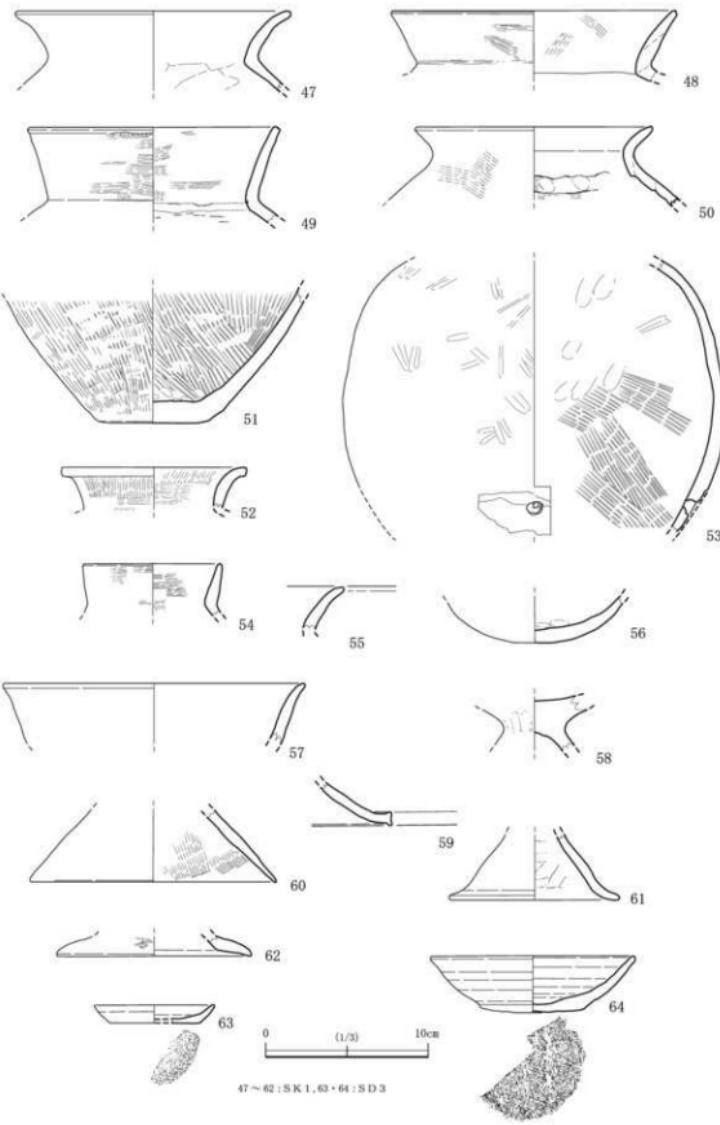
17 ~ 21 : S X 1

0 (1/3) 10cm

第 19 図 出土遺物実測図②



第20図 出土遺物実測図③



第21図 出土遺物実測図④

がみられる。38は外面に二枚貝による条痕がみられる。

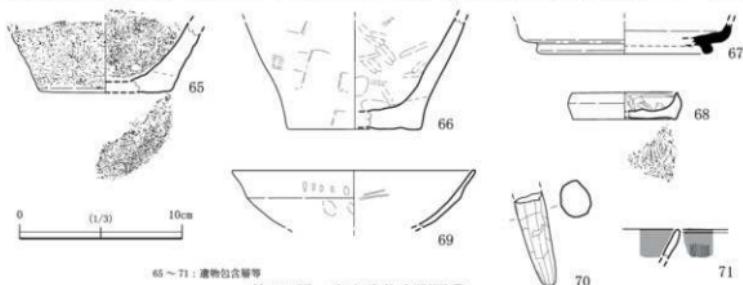
41～46は底部である。41～43・45・65は深鉢、44・46は浅鉢の底部である。42・44・46は、外面に二枚貝による明瞭な条痕がみられる。

82(図版16)は繩文土器の小片で、焼成後の穿孔がみられ、補修孔と考えられる。

66は遺物包含層から出土した弥生土器の壺の底部である。平底で、胴部はわずかに内湾気味に立ち上がる。外面はハケ目をナデ消している。

47～62はいずれも土師器で、SK1出土。47～50は壺、47は大きく外反する口縁で、端部は丸くおさまる。48の口縁は比較的直線的に外上へのびるもので、口縁端部と頸部に浅い沈線が入る。49は外上方に大きく直線的にのびる口縁を有するもので、上端部に一条の浅い沈線が巡る。内面の口縁部と体部の境には粘土繋ぎ目痕が明瞭に残る。体部内面はヘラケズリである。50は大きく外反する口縁部で、体部内面上位に粘土帶巻き上げ痕を顯著に残す。51～55は壺、51は体部下位から底部にかけてのもので、ハケ目調整の後、部分的にナデを施す。52の口縁部は大きく外湾し、端部は面を呈する。内外面に赤色顔料の塗彩が認められる。53は丸みのある体部で、外面はヘラミガキ、内面は指押さえ痕、ハケ目が残る。底部に近い部分に外面径1cm、内面径3mmの穴があり、人為的穿孔の可能性を有するが、一方で胎土に含まれていた小石が抜けた見方もでき断定はできない。54は小型丸底壺の口縁部で、僅かに内湾しながら上方に立ち上がる。55の口縁部は大きく外反し、端部はやや尖り気味に窄まる。56は椀の底部で、丸底を呈し、外面はヘラケズリ後、粗いナデ調整である。57～62は高杯である。57は杯部で、その体部上位は斜上方にのび、口縁は外反して端部が丸くおさまる。58は杯部と脚部の接合部である。59は裾部で、内面はヘラケズリ調整で、裾部に黒斑を有する。60は斜め下方に直線的に大きく開く脚部で、下位は窄まりながら丸くおわる。内面はハケ目後ナデており、比較的丁寧な調整が施されている。61は斜め下方に開く脚部で、裾部末端がさらに大きく開いておわるもので、内面ヘラケズリ。62は脚部下位で、裾部が大きく屈曲して開くものである。なお、以上の検出地点は32が床面上、他は中上位である。補足として、他に中位から検出した須恵器がある。小片のために図化しなかつたが、壺の胴部で、内面に同心円文、外面平行タタキが施されている。

63・64はSD3出土の土師器である。63は皿で、底部器壁は薄く、体部は外上方にのび、端部は丸味をもつ。底部外面に回転糸切り痕を有する。64は杯で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、端部はやや丸味をもつ。焼成は極めて良好で硬質である。内外面体部にロクロ目痕



第22図 出土遺物実測図⑤

第3表 出土遺物観察表①

No.	種別	固形	出土場所	器種	器形	法算(㎝)			主な調整(内) 外)	備考		
						L径 (復元径)	径高 (復元高)	底径 (復元径)				
1	18	13	SXI 第3層	縄文土器	浅鉢	(18.0)	(4.8)	-	密 真	灰褐色 灰黑色	ミガキ L縁部付近ナダ 側部ケズリ、肩～L縁部ナダ	浸状II線か
2	18	13	SXI	縄文土器	浅鉢	-	(3.1)	-	やや密 やや真	灰褐色 灰灰色	二枚貝条痕ナダ 突帯以上ナダ。以下二枚貝条痕	口縁部及突帯部に二枚貝条痕による削り目 内面部に炭化物付着
3	18	13	SXI 北西隅～中央部	縄文土器	浅鉢	(15.6)	7.7	(4.0)	やや粗 真	黒褐色 黒褐色+灰黄色	上位に指オサエ、ナダの後、全面 にヘラミガキ、下位は二枚貝によ る擦過の後、ナダ 位に全面ヘラミガキ、下位は指 オサエの後、丁寧なナダ	口縁部擦過の削り目
4	18	13	SXI 東西南黒褐色粘土	縄文土器	浅鉢	-	(4.0)	-	やや粗 真	灰色 暗灰褐色	指オサエ、ナダの後ヘラミガキ ヘラケズリか	右上位にヘラによる施 文あり
5	18	13	SXI 北東隅上層 灰黄色砂質土	縄文土器	浅鉢	-	(2.3)	-	粗 真	黒褐色 灰褐色	指オサエ、ナダの後ヘラミガキ 指オサエ、ナダの後ヘラミガキ	
6	18	13	SXI 東側	縄文土器	浅鉢	-	(3.3)	-	密 真	暗褐色 暗褐色	ミガキ 側部二枚貝条痕、削部以上ミガキ	
7	18	13	SXI 北西隅 第2層	縄文土器	浅鉢	-	(2.4)	-	密 真	黒褐色 黒褐色	ミガキ ナダ	
8	18	13	SXI 北西隅上層 灰褐色砂質土	縄文土器	浅鉢	-	(3.1)	-	密 真	濃灰褐色 灰褐色	二枚貝条痕後ナダ 二枚貝条痕後ヘラミガキ	口縁部より内折部欠損 外側縁少
9	18	13	SXI	縄文土器	浅鉢	-	(4.9)	-	やや密 真	灰褐色 灰褐色	ミガキ ミガキ、L縁部ナダ	内面部部分的に黒色物質付 着
10	18	13	SXI 中央部	縄文土器	浅鉢	-	(3.6)	-	密 真	黒褐色 黒褐色	ナダ ナダ、肩～側部ミガキ	浸状II線とみられる 口縫下外縁に凹痕状のくぼみ
11	18	13	SXI 北西隅～中央部	縄文土器	浅鉢	-	(2.4)	-	やや粗 良 比較的 精良	灰褐色 灰白	ミガキ ナダ 細密条痕あり	肩部に沈泡有り
12	18	13	SXI 北東隅上層 灰褐色砂質土	縄文土器	浅鉢	-	(3.2)	-	やや密 真	灰褐色 灰褐色	ミガキ ミガキ、L縁部ナダ	浸状II線とみられる
13	18	13	SXI 東西南黒褐色粘土	縄文土器	浅鉢	-	(1.7)	-	密 やや真	黒褐色 灰褐色	ナダ ナダ	リボン状突起部分か
14	18	13	SXI 南東隅 灰褐色砂質土	縄文土器	浅鉢	-	(2.7)	-	密 真	灰褐色 灰褐色	ミガキ 削成のため不規則	
15	18	13	SXI 北東隅上層 灰黄色砂質土	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	粗 真	灰褐色 灰褐色	丁寧なナダ ナダ	ヘラ描き文、刻文文
16	18	13	SXI 北西隅上層	縄文土器	浅鉢	-	(3.0)	-	密 真	黑色 黑色	ナダ 中位以下ミガキ、口縁部・外側上 部ナダ	
17	19	13	SXI 東西南黒褐色粘土	縄文土器	深鉢	-	(8.6)	-	やや密 やや真	灰褐色 (上部開口部) 灰褐色	ナダ 横へラナダ、底形後洗盤後丁 寧なヘラナダ (一部)	口縁部に斜め 付着帯形成、削 み跡有り
18	19	13	SXI 北東隅下層 黒褐色粘土	縄文土器	深鉢	(34.4)	(7.5)	-	密 真	黒褐色 に付着褐色	ミガキ	口縁部に斜め 付着帯形成、細密条痕か 条痕
19	19	14	SXI 北東隅 第2層	縄文土器	深鉢	(29.7)	(4.8)	-	密 真	黒褐色 黒褐色	ナダ、ヘラミガキ ナダ、条痕	口縁部、點付突起部、斜 めの削り目
20	19	14	SXI	縄文土器	深鉢	(25.0)	(11.3)	-	やや密 真	黒褐色 灰褐色	ナダ ナダ、口縁ナダ	余杭能突起付、削 目は一枚貝による削痕
21	19	14	SXI	縄文土器	深鉢	(25.0)	(18.0)	-	やや粗 やや真	黒褐色 黒褐色	二枚貝条痕 (丁寧) 後ナダ 二枚貝条痕 (粗い)、頭部二枚貝条 痕底ナダ	余杭能突起付、削 目は一枚貝による削痕
22	20	14	SXI	縄文土器	浅鉢	(49.2)	(7.3)	-	密 真	黒褐色 黒褐色	ミガキ ミガキ、二枚貝条痕	削痕付、ヘラ工具 による削痕、底部II縁 大型縁柱の縁部
23	20	14	SXI 北半部 黒褐色粘土質 一部黒褐色砂質土	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	-	密 やや良	灰褐色 灰褐色	ナダ ナダ	削痕付、ヘラ工具 による削痕、底部II縁 大型縁柱の縁部
24	20	14	SXI 北東隅 第2層	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	密 真	黒褐色 黒褐色	指オサエ、ナダの後ヘラミガキを 指オサエ、ナダの後二枚貝による 削痕	削痕部に點付突起部に削 み跡有り
25	20	14	SXI	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	やや密 真	上1～2cm黒色、以 下灰褐色 突帯下1cm以上黒色、 以下灰褐色	二枚貝条痕ナダ 二枚貝条痕ケズリ	突帯部は二枚貝によ る削痕 突帯部、突帯下にヘラ による削痕
26	20	14	SXI 北東隅 第2層	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	やや密 真	黑色 灰褐色	ナダ 突帯より下は二枚貝による削痕 ナダ	口縁部、突帯は二枚貝 による削痕
27	20	14	SXI 北西隅	生土器	素	-	(5.3)	-	粗 真	灰褐色 に付着褐色	指オサエ、ハケ目の後丁寧なナダ 指オサエ、強いナダ、植ナダ	口縫部、突帯に削 み跡有り

第4表 出土遺物観察表②

No.	博物館	出土地所	器種	器形	法量 (cm)	口径 (直光鏡) 部高 (内径値)	底径 (直光鏡) (直元値)	底土	堆成	色調 (内) 外)	主な調整 (内) (外)	備考	
28	20	14	SX1 北東隅 第2層	縄文土器	深鉢	-	(31)	-	密	眞	青灰色 灰黑色	様ナデ 様ナデ、二枚貝条板の後ナデ	
29	20	14	SX1 北東隅 第2層	縄文土器	深鉢	-	(26)	-	やや密	眞	黒褐色 にぶい黄褐色	二枚貝による堆溝の後、ナデか 二枚貝による堆溝か	
30	20	14	SX1 中央部	縄文土器	深鉢	-	(20)	-	やや密	やや眞	灰黃褐色 灰褐色	ナデ ナデ	口縁端部一枚貝押正削 日、貼付貝帶削片は厚 土に付着不明確、底状 況と異なれる
31	20	14	SX1 中央部	縄文土器	深鉢	-	(32)	-	やや密	やや眞	黒褐色 灰褐色	二枚貝条板ナデ ナデ	口縁端部一枚貝押正削 日による削片
32	20	14	SX1 第3層	縄文土器	深鉢	-	(46)	-	やや密	やや眞	黒褐色 灰褐色	ナデ ナデ	底状口端、突堤も底状、 貼付貝帶土への抜工具 による削正削
33	20	14	SX1	縄文土器	深鉢	-	(16)	-	やや粗	眞	暗灰褐色 灰褐色	ミザキ 条板	口縁端部に削目
34	20	14	SX1 北東隅 黒褐色粘土上、 一部褐色粘土質 上	縄文土器	深鉢	-	(24)	-	密	眞	灰褐色 灰黑色	ミザキ ミザキ 口縁内面部ナデ	
35	20	14	SX1 東側上層	縄文土器	深鉢	-	(24)	-	密	眞	黒色 灰黑色	上縁端・内面ナデ 二枚貝条板ナデ	
36	20	-	SX1 北東隅 第2層	縄文土器	深鉢	-	(26)	-	粗	眞	黒色 黒色	ナデの後ハラミガキ 様ナデ	
37	20	15	SX1 黒褐色下層 (黒褐色粘土上)	縄文土器	深鉢	-	(35)	-	やや密	やや眞	灰褐色 灰褐色	(条板後) ナデ (条板後) ナデ	貼付安物、ハラミガキ 辺縁2条
38	20	15	SX1 北東隅 黒褐色粘土上、 一部暗灰褐色 砂質土上	縄文土器	深鉢	-	(53)	-	やや密	やや眞	灰褐色 灰褐色	二枚貝条板後ナデ 口縁ナデ、頭部二枚貝条	頭部は一枚貝による削 片、貼付貝帶者 底状口端か
39	20	15	SX1	縄文土器	深鉢	-	(50)	-	やや粗	眞	闇灰褐色 灰褐色	指サエ、ハケ目の後ナデ 指サエ、ナデの後ハラミガキ	ハラミガキ(沈光鏡 左向)に3条板、右向 に2条板
40	20	15	SX1	縄文土器	深鉢	-	(48)	-	やや粗	眞	黒褐色 にぶい黄褐色	指サエの後丁寧なナデ 指サエの後丁寧なナデ	上位に突堤消磨剝離 剥離方向のハラミガキ平行 式縄文を施す
41	20	15	SX1 西隅 第1層	縄文土器	深鉢	-	(27)	(86)	粗	やや粗	浅黄色 灰褐色	丁寧なナデ(施設のため不明確) 密成りし状態不鮮明	内面黒斑あり
42	20	15	SX1 東側上層	縄文土器	深鉢	-	(37)	(59)	密	眞	にぼい黒褐色 灰褐色	二枚貝条板ナデ 二枚貝条板 沈光ケズリ後ナデ	
43	20	15	SX1	縄文土器	深鉢	-	(67)	56	やや粗	眞	暗灰褐色 にぶい黄褐色	指サエ、二枚貝による堆溝の後 ナデ 指サエ、二枚貝による堆溝の後 ナデ	
44	20	15	SX1 北東隅 第2層	縄文土器	浅鉢	-	(28)	36	やや粗	眞	暗灰褐色 黒褐色	ミザキ 条板	上手延
45	20	15	SX1 北西隅 第2層	縄文土器	深鉢	-	(39)	(65)	やや密	眞	にぶい暗褐色 灰褐色	ナデ ナデ 条板	
46	20	15	SX1	縄文土器	浅鉢	-	(19)	53	密	眞	灰褐色 暗灰褐色	ナデ 条板(二枚貝)、底外部擦痕	
47	21	15	SK1	土師器	甕	(170)	(50)	-	粗	やや粗	にぼい暗褐色 灰褐色	様ナデ、瓶ハラミガキ 様ナデ	
48	21	15	SK1 北半部	土師器	甕	(176)	(43)	-	やや粗	眞	にぼい黄褐色 灰褐色	ハケ目の後、ナデ 指サエ、ハケ目の後ナデ	
49	21	15	SK1 北半部	土師器	甕	(156)	(59)	-	やや粗	眞	にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	ハケ目の後ナデ、丁寧なナデ ハケ目の後ナデ	
50	21	15	SK1	土師器	甕	(146)	(49)	-	密	眞	にぼい黄褐色 灰褐色	ハケ目の後ナデ、ハケ目の後ナデ 指サエ、ハケ目の後ナデ	粘土巻き上げ物を明 顯に残す
51	21	15	SK1	土師器	甕	-	(63)	67	やや粗	眞	にぼい暗褐色 にぼい黄褐色	指サエ、ハケ目の後ナデ 指サエ、ハケ目の後ナデ	
52	21	15	SK1	土師器	甕	(114)	(26)	-	粗	眞	にぼい黄褐色 にぼい黄褐色 にぼい黄褐色 等	ハケ目の後ナデ ハケ目の後ナデ	赤色顔料濃布か
53	21	15	SK1	土師器	甕	-	(107)	-	やや粗	眞	にぼい暗褐色 灰褐色 にぼい黄褐色	指サエの後ハケ目後ナデ 指サエの後ナデハラミガキ	底部下位に焼成段差孔
54	21	15	SK1 北半部	土師器	小型丸底甕	(86)	(32)	-	密	やや粗	白褐色 等	ハケ目の後ナデ ハケ目の後ナデ	

を明瞭に残す。

67～71は遺物包含層出土。67はハの字形に外方に開く高台をもつ須恵器の杯身である。焼成は悪く軟質である。68は土師器の皿である。内面に強い指サササ痕が並ぶ。外面体部は底部から外上方にのび、途中から内側に曲がる。回転糸切り痕を有する。69は和泉型と思われる瓦器楕である。口縁部下位に指頭圧痕が並ぶ。内面の暗文は摩滅のため不明瞭である。70は土師質土器の足鍋脚部である。全面にヘラナデによる面取りを施している。71は同安窯産の青磁碗で口縁部下位に継方向の擗描文を有する。

石器・石製品(第23図、図版16)

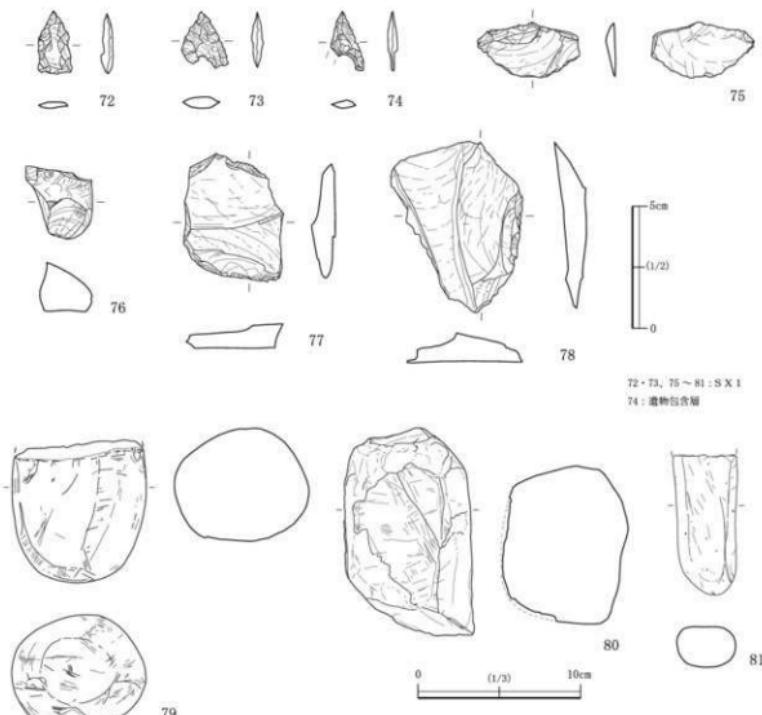
72～73・75～81はSX1、74は遺物包含層出土。72～74は石鎌。72は平基無茎式で、平面は五角形状を呈する。73・74は凹基無茎式で、73は脇抉がやや浅い。74は脇抉が深く、縁辺には丁寧な調整剥離が施されている。75・77・78は剥片で、77には一部自然面が残る。76は石核である。79・80は敲石で磨石としても利用している。79は下面に敲打痕および擦痕が認められる。80は、器面が層状に剥離している。81は砥石で、細長い自然円錐の表面全体と裏面の一部が利用され、平滑化している。石材は、72・74・75・77・78は安山岩、73・76は姫島産黒曜石、79・80は花崗岩質岩石で、81は安山岩系とみられる。

第5表 出土遺物観察表③

No.	種別	国版	出土地所	器種	器形	法量(cm)			筋	破成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	参考
						口径 (腹径)	高さ (腹径)	底径 (腹径)					
55	21	15	SK1	土師器	壺	—	(26)	—	やや粗	真	灰黄褐色 に赤褐色	ハケ目(後丁寧な横ナデ) ハケ目(後丁寧な横ナデ)	
56	21	16	SK1	土師器	Hor鉢	—	(29)	—	密	やや粗	灰白色 に赤褐色	由サエの後ナデ 灰白色に赤褐色 ハラケリの後深いナデ	
57	21	16	SK1	土師器	高杯	(18.6)	(37)	—	真	真	暗褐色 相色	暗褐色 相色	
58	21	16	SK1 東南隅床上	土師器	高杯	—	(34)	—	粗	不良	赤褐色 赤褐色	崩滅のため不明瞭 崩滅のため不明瞭 由銀板	
59	21	16	SK1	土師器	高杯	—	(26)	—	やや粗	不良	赤褐色 黄褐色	ハラケズリ ナデ	相部に黒斑
60	21	16	SK1	土師器	高杯	(15.2)	(45)	—	やや粗	真	灰に赤褐色 に赤褐色	ハケ目(後丁寧な横ナデ) ハケ目(後丁寧な横ナデ)	
61	21	16	SK1 東南隅床上	土師器	高杯	—	(40)	—	真	真	相色 相色	ナデ、ハケズリ 相ナデ、不明瞭(ヘラミギカ)	
62	21	16	SK1	土師器	高杯	—	(1.2)	(12.0)	やや粗	真	に赤褐色 に赤褐色	ハラケズリ、ナデ に赤褐色	ハケ目(後ナデ)
63	21	16	SD3	土師器	直	(7.4)	11	(5.3)	やや粗	真	灰褐色 に赤褐色	回転ナデ 回転ナデ、底部糸切りの後ナデ	
64	21	16	SD3	土師器	杯	(12.6)	(3.5)	(6.4)	やや粗	真	に赤褐色 に赤褐色	回転ナデ、見込みに左右方向の仕上げナデ	
65	22	16	北側遺構面 縄文土器	縄錦	—	(4.3)	(8.2)	粗	真	に赤褐色 に赤褐色	回転ナデ、底部糸切り		
66	22	16	北側遺構面 陶生土器	壺	—	(6.8)	(8.2)	やや粗	真	灰黄褐色 に赤褐色	由サエ、ハケ目(後ナデ) 由サエ、ハケ目(後ナデ)		
67	22	16	SX1 南東側 黄褐色砂質土	瓶底器	杯身	—	(19)	(10.6)	粗	不良	灰黄褐色 灰黄褐色	器面剥離のため不明 器面剥離のため不明	
68	22	16	北側遺構面	土師器	直	(6.6)	(1.7)	(6.4)	やや粗	真	明赤褐色 明赤褐色	低い回転ナデ 回転ナデ、底部糸切り	
69	22	16	北側砂場	瓦器	純	(15.0)	(35)	—	密	やや粗	赤色 白(白)	ハラミギによる縞文 由サエ、ナデ	口縁部下位に指頭圧痕 (瓦器) 瓦部 相部豊か
70	22	16	表土	土師質土器	足鍋	—	(37)	—	やや粗	真	に赤褐色 に赤褐色	ハラナデによる面取り ハラナデによる面取りの後、ナデ	
71	22	16	北側瓦層	青磁	楕	—	(18)	—	やや粗	真	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	同安窯系

第6表 出土遺物観察表④

No.	博国	図版	出土場所	器種	器形	法算 (cm)			石材・材料	参考
						長さ (保存値)	幅 (保存値)	厚さ (保存値)		
72	23	16	SX1 中央部	石器	石器	26	1.4	0.65	12	安山岩 平基式
73	23	16	SX1 北東側 第2層	石器	石器	23	1.9	0.65	13	黒曜石 (龍島産) 円基式
74	23	16	北側側面	石器	石器	2.45	1.35	0.35	67	安山岩 凹丸式 一方の刃剥は欠損 全体風化している
75	23	16	SX1 北東側下層 黒褐色粘質土	石器	刮削器	23	4.2	0.5	40	安山岩 大部分、大洞離開まま 部分的に細かい剥離面がある
76	23	16	SX1 北東側下層 黒褐色粘質土	石器	刮削片	30	2.7	2.0	139	黒曜石 (龍島産)
77	23	16	SX1 第3層	石器	刮削片	5.25	4.1	1.1	236	安山岩
78	23	16	SX1 北東側下層 黒褐色粘質土	石器	刮削片(石核)	7.0	5.4	0.13	329	安山岩 表面は細かい剥離がない 下面は大きな剥離面2面からなる
79	23	16	SX1	石器	敲打石 (磐石)	(8.8)	8.3	6.95	818	花崗岩磐石 全体に摩滅を受け一部剥離する 表面に細かい剥離が部分的に残る
80	23	16	SX1	石器	磨石	12.8	7.9	7.4	1461	花崗岩磐石 表面剥離している部分が多い 全体に摩滅している(剥離が丸味をもつ)
81	23	16	SX1 北西側	石製品	砾石	(8.6)	4.0	2.5	161	安山岩系 人為的に削った石ではなく、河原石をそのまま利用 研ぎ面に擦痕が浅くわずかに残る



第23図 出土遺物実測図⑥

2) 2地区

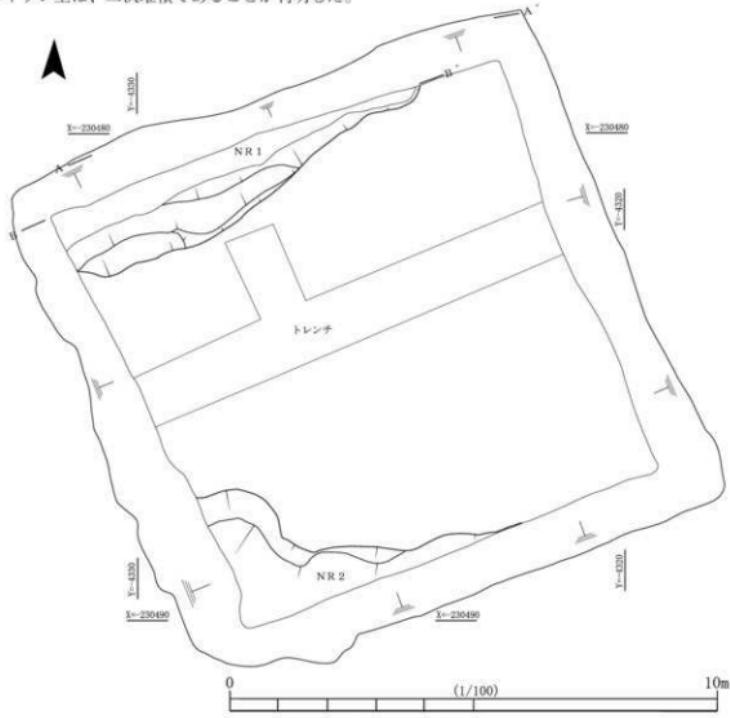
(1) 調査区の概要

2地区は1地区から南南東方向へ約40m離れた標高132mの耕作地面上に所在する。

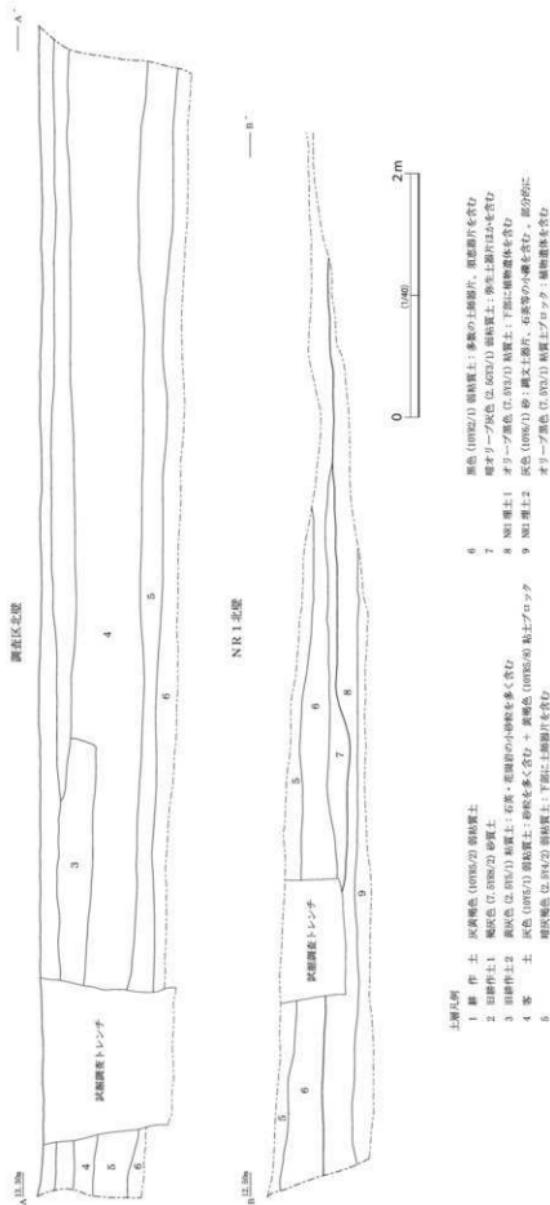
今回の調査では流路跡を2か所で検出した。共に肩部上端ラインが不整形で、法面も緩やかであり、自然流路或いは自然発生的な落ち込みの可能性が高い。また埋土中には、縄文時代から古墳時代の遺物が混在し、両流路とも古墳時代に埋没したと思われる。なお、遺物はいずれも小片であり、上位からの流れ込みと推察できるが、器面の摩滅は少ないため、遠地からの流入の蓋然性は低く、近接地に各時代の遺構の存在が予想される。

北側壁面でみると（第25図 図版18）、上位の現耕作土および旧耕作土1の下面はほぼ水平であるが、以下の層の下面是いずれも西側から東側方向への緩やかな傾斜がみられる。流路を検出した黒色弱粘質土下面までは深さ12～13mを測る。

なお、流路の検出面よりも下層の状況を確認するため、調査区中央部分に西南西一東北東方向およびそのやや西寄り部分に直交するトレンチを設定し、深さ約30～40cmほど掘り下げた。結果、地山は検出されなかったが、遺物が出土した。そのため、流路を検出した灰黄色または暗赤褐色の花崗岩バイラン土は、二次堆積であることが判明した。



第24図 遺構配置図



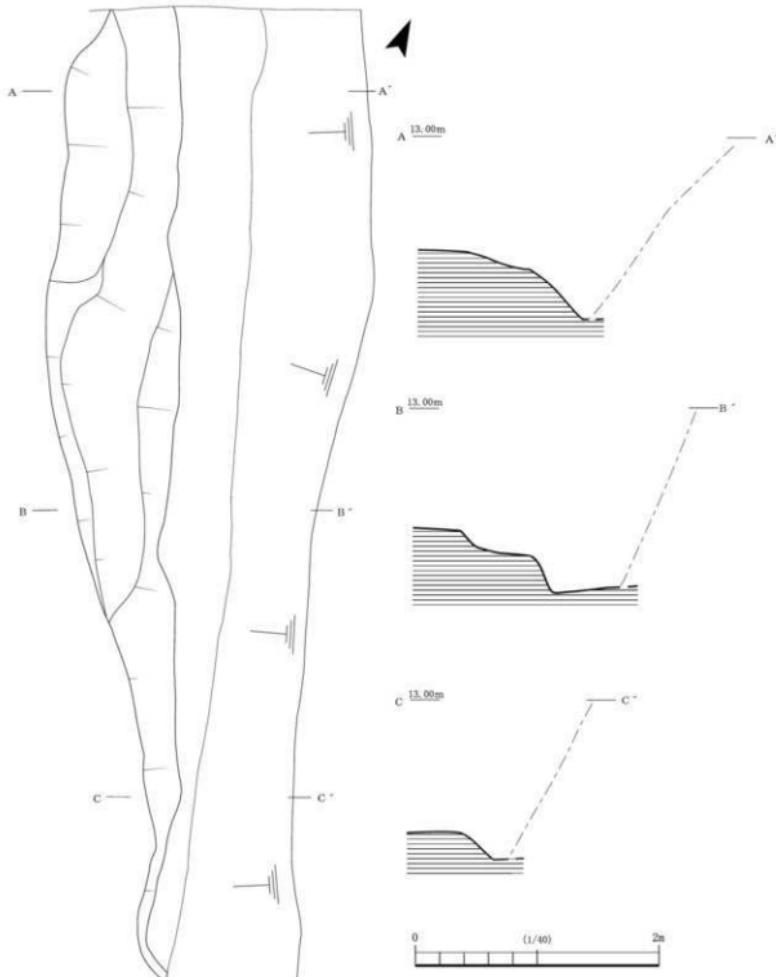
第25図 調査区北壁、NR 1 北壁土層断面図

(2) 遺構

標高約12m前後の灰黄色または暗赤褐色砂質土層の上面において、調査区内の北西側と南西隅の2か所で比較的規模の大きい流路跡を検出した。

NR1 (第26図、図版18)

調査区北西側に位置し、大半は北側の調査区外におよぶ。規模は現状で長さ8m以上×幅1.6m以上を測り、検出した肩部上端ラインは西南西から東北東の方向にのび、一部蛇行するが、NR2より直線的である。法面は段を有しながら下降するもので、総じて緩やかである。深さは最大約45cmを

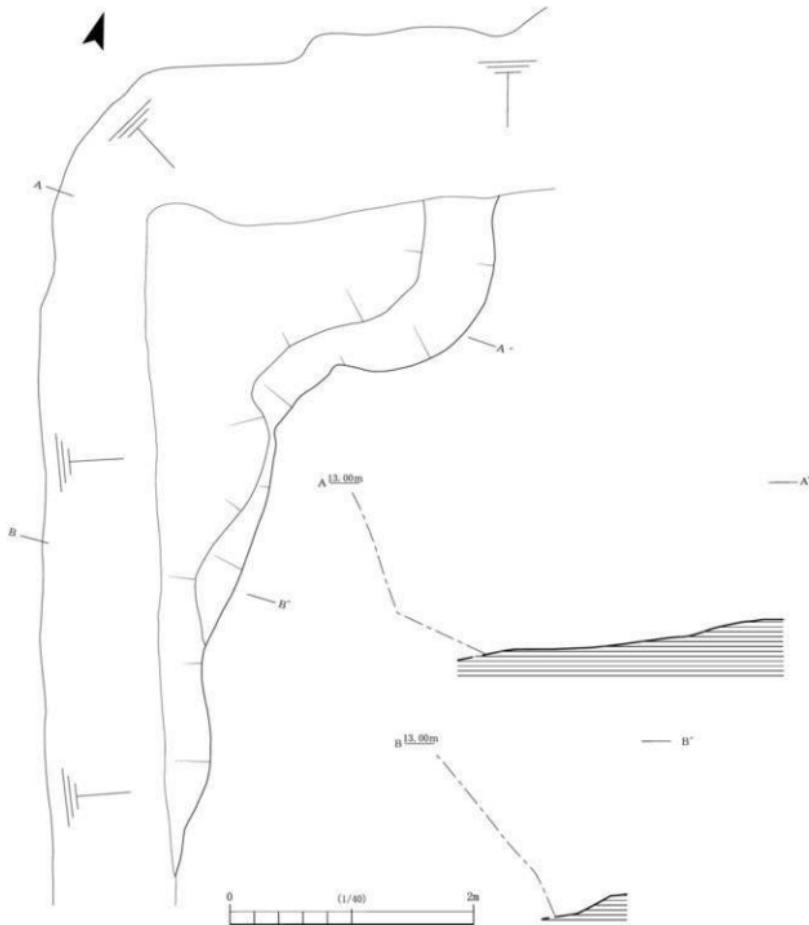


第26図 NR1実測図

測る。埋土は2層で（第25図）、上位のオリーブ黒色粘質土層下部には植物遺体を含む。下位は石英等の砂礫が混じる灰色砂層で、部分的に植物遺体を含むオリーブ黒色粘質土を有する。また当層では縄文土器、弥生土器の包含が認められた。

NR2 (第27図、図版18)

調査区西南隅に位置する。遺構の大半は西壁並びに南壁の調査範囲外におよぶため、全体の平面形状は不明である。規模は現状において長さ5.3m以上×幅2.9m以上を測り、検出した遺構の肩部上端ラインは北西から南東方向にのびるが直線的ではなく、蛇行する。法面は緩やかな傾斜を成し、深さは約70cmあり、床面は比較的平坦面を形成する。



第27図 NR2実測図

(3) 遺物

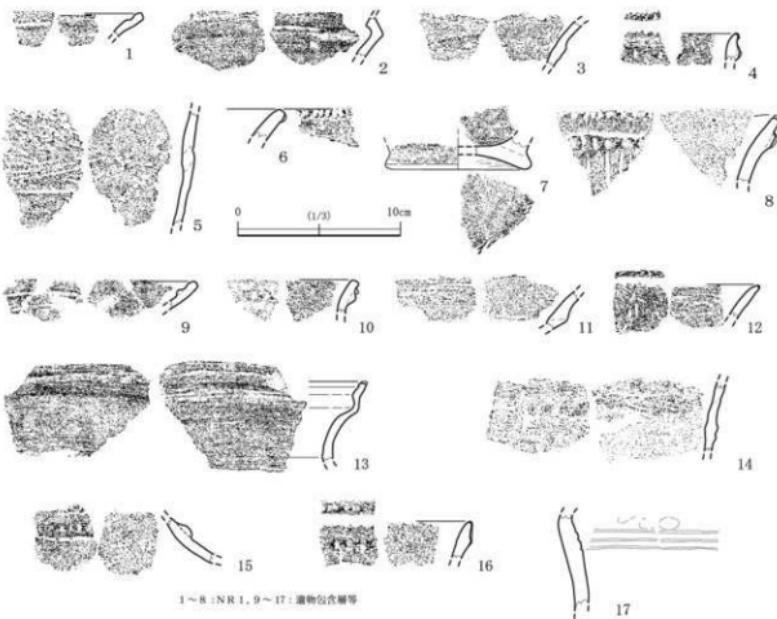
土器（第28～30図、図版19～21）

1～8はNR1から出土。1～3・5・7・8は縄文土器、4・6は弥生土器である。1～3は浅鉢である。1は口縁部内面に凹線文を施す。2は口縁が大きく外反し、端部は屈曲しさらに外方に立ち上がるるもので、内面端部下に沈線に入る。内面黒色研磨が施されている。3は胴部、頸部が強く屈曲するものとみられる。5は深鉢の胴部で、外面は屈曲部を境に上位が丁寧なナデ、下位は条痕が施される。4は壺の口縁で、上端に刻目、外面直下に二枚貝殻頂部の押圧が施された低い貼付突帯を有する。7は浅鉢底部で、上げ底を呈する。8は深鉢の口縁部で、端部に刻目が施される。外面には刻目を有する台状の突帯が貼付き、その直下に縱方向のヘラによる沈線を現状で5条確認できる。

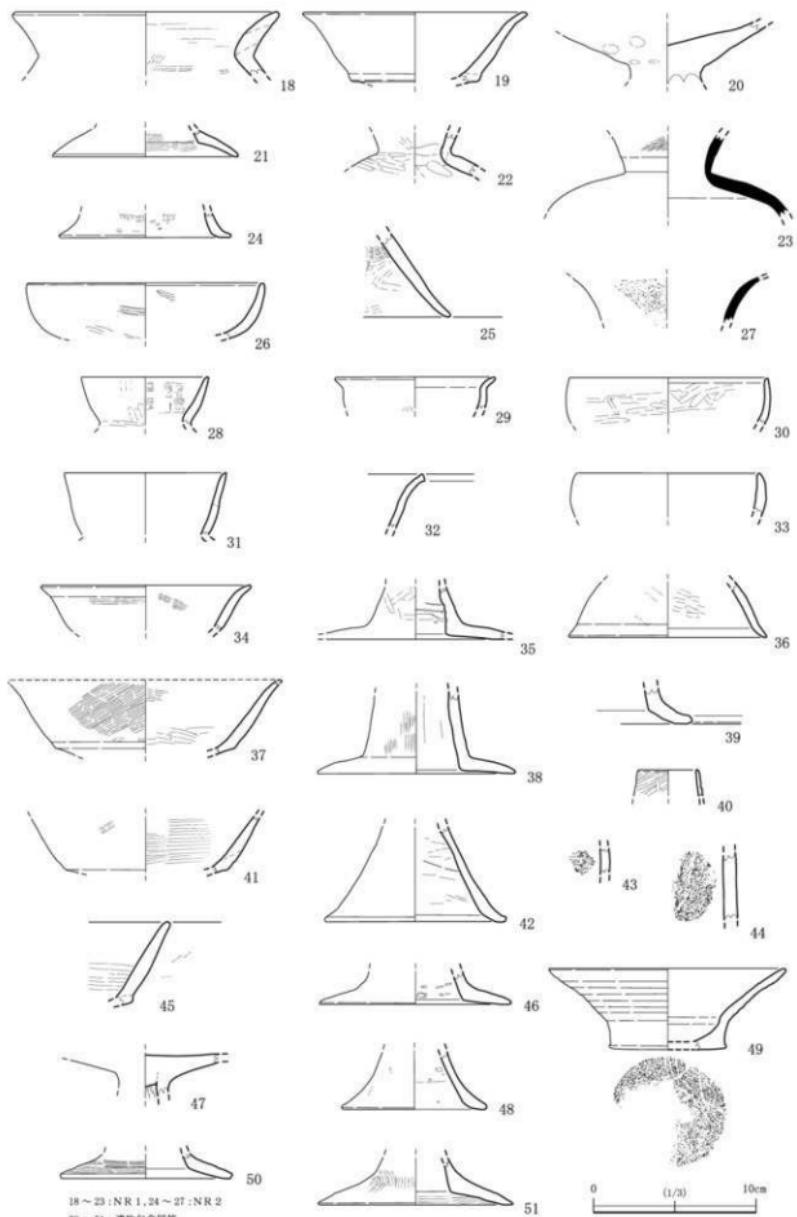
9～17は遺物包含層より出土。9～14は縄文土器、15～17は弥生土器である。9・11～13は浅鉢である。9は内面直下に低い突帯が巡る。11は胴部の屈曲部分で、内外共丁寧なナデ調整を施す。13は口縁部で、大きく外反し、上部は内側へ屈曲した後外方へ屈折し、端部は面をもつ。10・14は深鉢である。10は口唇部に等間隔に深い刻目を有する。

15は壺の頭部で、刻目を有する突帯が付く。16は壺の口縁部で、端部および突帯に刻目が施されている。17は壺の口縁部直下の体部で、3条の沈線を施す。

18～23はNR1、24～27はNR2出土。28～59は遺物包含層等からの出土。18は土師器の壺



第28図 出土遺物実測図①



第29図 出土遺物実測図②

18~23: NR 1, 24~27: NR 2
28~51: 遺物包含層等

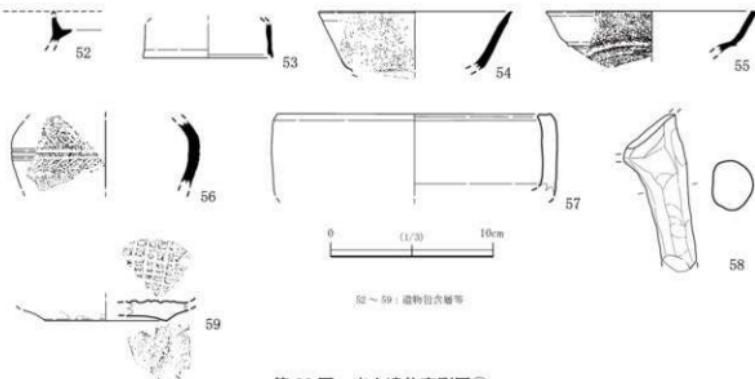
口縁部で器壁が厚い。19・20は土師器高杯の杯部で、内外面に赤色顔料を施している。34・37・41・45・47も土師器の高杯杯部である。21・24・25・35・36・38・39・42・46・48・50・51は土師器の高杯裾部である。48は外面にわずかに赤色顔料が残る。22・28・31は土師器の壺で、22は頭部下位にヘラミガキ、内部にヘラケズリを施している。23・27・52～56は須恵器である。23は長頸壺で、頸部に櫛描波状文を施す。56は壺あるいは甌の胴部である。沈線2条と刺突文を施す。26は土師器の碗である。29・30・33は土師器の鉢である。40・43・44は製塙土器である。40は小型でコップ形を呈し、外面にタタキ目痕を有する43・44は内面に布目痕を有する。49は土師器の杯で外面にロクロ目を明瞭に残す。57は土師質土器の焙烙である。58は土師質土器の足鍋脚部である。59は美濃焼のおろし皿である。ヘラによる格子目状の卸し目を有する。

土製品・石器・石製品・鉄器（第31図、図版22）

60～75・77・78は遺物包含層等から、76はN R 2から出土した。

60～62は土製品で、60・61は土師質の管状土錐である。60は中央部が膨らむタイプで、61は細長いタイプである。62は円盤状土製品で、瓦片を利用し、その周縁を打ち欠き成形したものである。

63～70は打製石錐である。65は石材が姫島産黒曜石で、その他は安山岩である。63～67・70は凹基無茎式で、66は端部が角張る。67は未製品の可能性がある。68・69は平基式で、69の片面に斜め方向の細かい放射状裂痕が認められる。72は安山岩製の石錐で、平面不整三角形、一部縁辺に調整剥離を施す。錐部先端はわずかに丸みをもつ。71は剥片石核で、下端に打撃痕を有する。石材は姫島産黒曜石。73は打製石斧未製品の可能性があり、外周を粗く打ち欠き、扁平で不整長方形状を呈する。平面中央部には石自体の節理に沿って剥離する。石材は安山岩系か。74・75は石器剥片とみられ、石材は無斑晶質安山岩。74は平面不整三角形で、片面の一部縁辺に細かい剥離面が確認でき、側面一部に自然縫面を残している。75は平面不整四角形を呈し、大剥離面のみで、調整剥離は認められない。76は石錐である。扁平な平面楕円形の自然石の長軸方向側を粗く打ち欠き、抉りを施す。石材は火山岩。77は長方硯で、硯縁から墨堂の一部である。石材は赤色頁岩。78は鉄器で、鉄錐の一部、身部下半部である。茎部は欠損するが、関部分が残る。身中央には鎬がとおる。



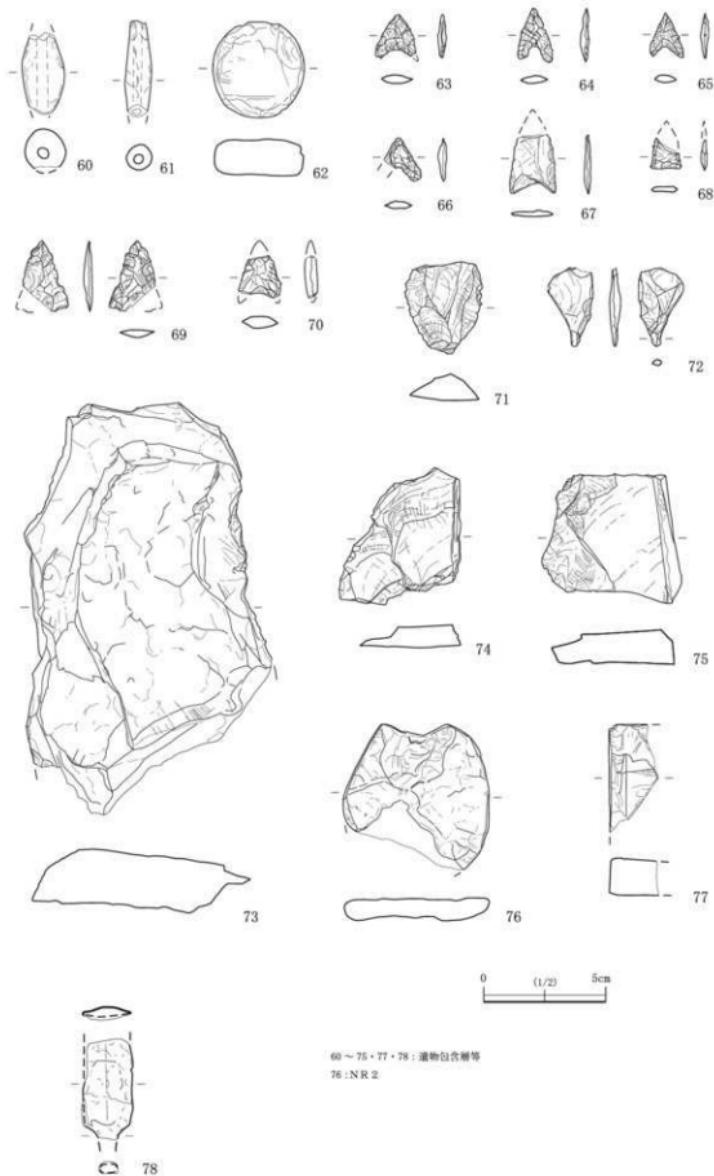
第30図 出土遺物実測図③

第7表 出土遺物観察表①

No.	標識	開拓	出土場所	器種	器形	法面 (cm)	上口 (後元積) 高さ (前元積)	底面 (後元積) 高さ (前元積)	胎土	焼成	色調 (内) 外)	主な調整 (内) (外)	備考
1	28	19	N R I (黒褐色粘質土)	縄文土器	浅鉢	-	(1.4)	-	やや粗	良	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	ハケ目の後ナダか ハリナダか	
2	28	19	N R I 下層 (赤白色砂)	縄文土器	浅鉢	-	(2.9)	-	やや粗	良	黄褐色+灰褐色 灰褐色	一枚目による擦過の後丁寧なナダ 二枚目による擦過の後丁寧なナダ	
3	28	19	N R I (黒褐色粘質土)	縄文土器	浅鉢	-	(2.8)	-	密	良	灰褐色	丁寧な横ナダ 二枚目による擦過の後ナダ	
4	28	19	N R I 下層 (赤褐色粘質土)	縄文土器	盤	-	(1.7)	-	やや粗	良	褐灰色 灰白色+橙色	横ナダ 横ナダ	奥帶に一枚目削部による押圧跡
5	28	19	N R I (黒褐色粘質土)	縄文土器	深鉢	-	(7.0)	-	粗	良	オリーブ黒色	指サエの後丁寧なナダ 指サエの巻貝による擦過か	
6	28	19	N R I 下層 (赤褐色粘質土)	縄文土器	盤	-	(2.0)	-	粗	良	に赤い橙色 に赤い褐色	ハラミガキ 横ナダ	
7	28	19	N R I (黒褐色粘質土)	縄文土器	鉢	-	(2.0)	(9.0)	粗	良	褐灰色 に赤い黄褐色	タクノの後ナダか ハラミの後ナダか	
8	28	19	N R I 稕種	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	粗	良	褐灰色 に赤い黄褐色	丁寧なナダ 横ナダ、ナダ	口沿部に削目、腹部に 貼付突起、二枚目段階 による押圧
9	28	19	南東部 混合層2	縄文土器	浅鉢	-	(1.7)	-	密	やや良	褐灰色 灰褐色	ナダ	口縁周部の尤難にごく わずかに赤色顔料が残る
10	28	19	混合層	縄文土器	深鉢	-	(2.1)	-	やや粗	良	黒褐色 黒褐色	柔軟の後ナダか ナダ	
11	28	19	灰褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	-	(2.7)	-	やや粗	良	黄灰色 灰褐色+灰褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ	
12	28	19	北東部 混合層2	縄文土器	浅鉢	-	(2.1)	-	やや粗	良	黑色 黑色	ナダ 柔軟(容表層)	
13	28	19	混合層	縄文土器	浅鉢	-	(5.9)	-	粗	良	黑色 褐灰色+灰褐色	一枚目による擦過の後丁寧なヘラ ミガキ 一枚目による擦過の後丁寧なヘラ ミガキ	
14	28	19	混合層	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	粗	良	灰褐色 灰褐色	ナダ 丁寧なナダ、柔軟(二枚目)	
15	28	19	北西部 混合層2	縄文土器	盤	-	(2.8)	-	やや粗	やや良	黄褐色 灰褐色	横ナダ 横ナダ	貼付突起に削目
16	28	19	北西部 混合層2	縄文土器	盤	-	(2.3)	-	やや粗	良	褐灰色 に赤い黄褐色	ハラミの後ナダ ナダ	奥帶に二枚目の合わせ 目で押圧削目
17	28	19	北東部 混合層2	縄文土器	盤	-	(5.9)	-	やや粗	良	灰白色 黒褐色	ハラミの後丁寧なナダ ハラミの後丁寧なナダ、腹部に指 サエの後ナダ	
18	29	19	N R I (黒褐色粘質土)	土器	盤	(16.4)	(3.9)	-	やや粗	やや良	に赤い橙色 に赤い褐色	ハラミの後ナダ 指サエ、ハラミの後ナダ	
19	29	19	N R I (黒褐色粘質土)	土器	高杯	(13.8)	(4.4)	-	粗	良	明赤褐色 明赤褐色	横ナダ 丁寧な横ナダ	内外面に赤色顔料微布
20	29	20	N R I (黒褐色粘質土)	土器	高杯	-	(3.7)	-	密	やや良	明赤褐色 明赤褐色	指サエの後丁寧なナダ 指サエ、ナダ、脚部ハケ目の 後ナダか	外面に赤色顔料がわざ かに残る
21	29	20	N R I (黒褐色粘質土)	土器	高杯	-	(1.6)	(11.4)	密	良	に赤い橙色 橙色	ハラミの後ナダ ハラミの後ナダ	
22	29	20	N R I (黒褐色粘質土)	土器	盤	(4.4)	(2.6)	-	やや粗	良	明赤褐色 明赤褐色	指サエ、横ナダ 横ナダの後ハラミガキか	
23	29	20	N R I (黒褐色粘質土)	長盤	長盤	-	(5.1)	-	やや粗	良	灰色 灰色	回転ナダ、回転ヘラケズリ 回転ナダ	底部に波状文あり
24	29	20	N R 2 (黒褐色粘質土)	土器	高杯	-	(1.5)	(10.6)	密	やや良	に赤い橙色 橙色	ハラミの後ヘラケズリか ハラミの後ナダ	
25	29	20	N R 2 (黒褐色粘質土)	土器	高杯	-	(5.1)	(10.8)	やや粗	やや良	淡黄色 灰褐色	ハラミの後ナダ、後ヘラミガキ 丁寧な横ナダ	
26	29	20	N R 2 (黒褐色粘質土)	土器	碗	(14.4)	(3.4)	-	やや粗	良	に赤い橙色 橙色	ハラミガキ一部ヘラナダ 指ナダ一部ヘラナダ	
27	29	20	N R 2 (黒褐色粘質土)	長盤	盤 or 碗	-	(2.6)	-	やや粗	良	灰色 灰色	回転ナダ 回転ナダ	2段の波状文が残る

第8表 出土遺物観察表②

No.	種類	固版	出土場所	器種	器形	法量(cm)			組立	焼成	色調(内) 明るめ色 暗め色	主な測定(内) ナダ ナダの後ハラミガキ	参考
						口径 (復元値)	器高 (復元値)	底径 (復元値)					
28	29	20	北西屋 包含層2	土陶器	壺	(78)	(30)	-	やや粗	やや良	明るめ色 暗め色	ハケ目の後ナダ ナダの後ハラミガキ	
29	29	20	北西屋 包含層2	土陶器	壺	(98)	(19)	-	粗	やや良	暗め色 浅黄色	暗めのため不明瞭(ミタキナ) 僅ナダ、底方向に一部ハケ目	赤色顔料塗布
30	29	20	北西屋 北隅 包含層2	土陶器	鉢	(122)	(29)	-	やや粗	良	浅黄色 浅褐色	回転ナダの後ハラミガキ 回転ナダの後ハラミガキ	
31	29	20	南西屋 包含層2	土陶器	壺	(100)	(38)	-	やや粗	良	にぼい・青褐色 にぼい・褐色	丁寧なナダテ 丁寧なナダテ	
32	29	20	北西屋 北隅 包含層2	陶生土器	鉢or高杯	-	(33)	-	やや粗	やや良	暗色 明るめ色	ハケ目の後ナダか ハケ目の後ナダ。ハラミガキか	
33	29	20	北西屋 包含層2	土陶器	鉢	(110)	(27)	-	粗	やや良	暗色 暗色	回転ナダの後ハラミガキか 回転ナダの後ハラミガキか	にぼい・暗色 削減著しい
34	29	20	トレンチ 包含層2	土陶器	高杯	(130)	(28)	-	やや粗	やや良	暗色 明るめ色	指オサエ。ナダの後ハラミガキか 指オサエ。ナダの後ハラミガキか	
35	29	20	トレンチ 包含層2	土陶器	高杯	-	(32)	-	粗	良	にぼい・褐色 にぼい・褐色	ハラケズリ。南部は丁寧なナダ 指オサエの後ナダ。ハラミガキ	
36	29	20	南西屋 包含層2	土陶器	高杯	-	(34)	(12.2)	やや粗	やや良	暗色 にぼい・褐色	指オサエ。ナダの後ハラミガキ 指オサエ。ナダの後ハケ目。さら にナダ	
37	29	20	南西屋 包含層2	土陶器	高杯	(160)	(4.5)	-	やや粗	良	にぼい・褐色 にぼい・褐色	ハケ目の後。丁寧なナダ。下位に ハラミガキ 指オサエ。ナダの後ハケ目。下位 に横ナダ	
38	29	20	北西屋 包含層2	土陶器	高杯	-	(5.1)	(11.2)	やや粗	やや良	暗色 暗色	ハラケズリ 旋方向のハケ目。横ナダ	
39	29	20	北西屋 包含層2	土陶器	高杯	-	(2.2)	-	粗	良	にぼい・青褐色 にぼい・褐色	ヘラケズリの後ナダ 円周に沿ったナダ	
40	29	20	北西屋 包含層2	土陶器	製塙土器	(38)	(1.6)	-	粗	良	にぼい・青褐色 にぼい・青褐色	丁寧なナダ ナダの後タタキ	
41	29	20	トレンチ 包含層2	土陶器	高杯	-	(3.5)	-	やや粗	やや良	暗色 にぼい・青褐色	指オサエ。ナダの後ハケ目 指オサエ。ナダの後ハケ目か	
42	29	20	北西屋 北隅 包含層2	土陶器	高杯	-	(6.9)	(10.4)	繊密	良	にぼい・青褐色 にぼい・青褐色	指オサエの後左なめ上方向のヘ ラケズリ ハケ目の後ナダか	背面削減著しい
43	29	21	表探	土陶器	製塙土器	-	(1.6)	-	粗	良	赤褐色 灰リーブ色	有目直彫 指オサエ。ナダ	
44	29	21	包含層1	土陶器	製塙土器	-	(4.7)	-	やや粗	良	にぼい・青褐色 にぼい・青褐色	無い日肌、赤目痕か? 指オサエ。ナダの後タタキか?	
45	29	21	北西屋 包含層2	土陶器	高杯	-	(5.1)	-	やや粗	やや良	にぼい・青褐色 にぼい・青褐色	指オサエ。ナダ。ハケ目の後丁寧 なナダ 指オサエ。ナダ。ハケ目の後丁寧 なナダ	
46	29	21	南西屋 包含層2	土陶器	高杯	-	(2.0)	(11.8)	やや粗	良	にぼい・青褐色 にぼい・青褐色	円周に沿ったナダと深いナダ ハラケズリ。ヘラナダ	
47	29	21	トレンチ 包含層2	土陶器	高杯	-	(2.6)	-	やや粗	やや良	暗色 暗色	ハケ目の後。丁寧なナダ ハケ目の後。丁寧なナダ	
48	29	21	北西屋 包含層2	土陶器	高杯	-	(3.0)	(9.0)	やや粗	やや良	灰褐色 にぼい・青褐色	指オサエ。ナダの後左方向のヘラ ケズリ 指オサエ。ナダの後ハケ目	わずかに赤色顔料残る
49	29	21	灰褐色砂質土	土陶器	杯	-	(4.2)	7.2	やや粗	良	にぼい・青褐色 にぼい・青褐色	回転ナダ 回転ナダ。底部回転赤切りか	
50	29	21	トレンチ 包含層2	土陶器	高杯	-	(1.5)	- 10.6	粗	良	にぼい・褐色 にぼい・褐色	ヘラケズリ。横ナダ ハケ目	
51	29	21	包含層2 黑色粘土	土陶器	高杯	-	(3.9)	(12.0)	粗	良	にぼい・褐色 にぼい・褐色	ヘラケズリ。ハケ目の後。ナダ ハケ目。ナダ	
52	30	21	包含層2 黑色粘土	燒造器	杯身	-	(1.6)	-	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ	
53	30	21	トレンチ 包含層1	燒造器	蓋か	(8.0)	(21)	-	やや粗	良	青灰色 青灰色	回転ナダ 回転ナダ	
54	30	21	包含層	燒造器	蓋か	(11.8)	(36)	-	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	回転ナダ 回転ナダ	放射状沈澱



第31図 出土遺物実測図④

第9表 出土遺物觀察表③

No.	辨別	固版	出土場所	器種	器形	法量 (cm)			助土	地成	色調 (内) (外)	主な調査 (内) (外)	備考
						長さ (原元値)	幅 (残存値)	厚さ (残存値)					
55	30	21	北西部 北鍋 包合層 2	瓶壺器	瓶	(130)	(26)	-	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	回転ナデ 回転ナデ	丁度に構造状況
56	30	21	北西部 北鍋 包合層 2	瓶壺器	瓶 or 瓶	-	(40)	-	粗	良	灰褐色 灰褐色	回転ナデ 回転ナデ	沈縫 2 条、刺突文施文
57	30	21	南東部 包合層 2 (南側包合層)	土師質土器	埴輪	(168)	(52)	-	粗	良	灰褐色 灰褐色	回転横ナデ ヘタリ等が僅少のため不明瞭	口縁内面一部 (土煙) 色調 赤褐色
58	30	21	北部 捲瓦土中	土師器	足端	-	(97)	-	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	脚部 面オサエ、ナデ 脚部 面オサエ、ナデ	
59	30	21	表様	陶器	おろし皿	-	(175)	(74)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ。底部希切り	ヘタによる格子目状の 削し目
60	31	22	包合層 1	土製品	土師	残存長 (34)	幅 17	孔径 0.4	緻密	良	灰褐色	ナデか ナデか	重さ 83 g
61	31	22	包合層	土製品	土師	残存長 (39)	幅 11	孔径 0.4	緻密	良	浅黄色		重さ 40 g
62	31	22	整地土	土製品	円筒状 土製品	径 39 × 37	最大厚 15	重さ 25.3	密	良	灰白色 (二次整形部分) 灰褐色 (原製品面)		瓦の軸用品

第10表 出土遺物觀察表④

No.	辨別	固版	出土場所	器種	器形	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
						長さ (残存値)	幅 (残存値)	厚さ (残存値)			
63	31	22	包合層 1	石器	石盤	1.8	1.6	0.35	0.7	安山岩	円盤式
64	31	22	灰褐色紗目土	石器	石盤	2.2	1.4	0.35	0.7	安山岩	円盤式
65	31	22	トレンチ上位 淡褐色紗	石器	石盤	1.8	1.35	0.32	0.3	黒曜石 (巣島産)	円盤式
66	31	22	包合層	石器	石盤	1.75	1.5	0.32	0.5	安山岩	円盤式
67	31	22	南西部 包合層 2	石器	石盤	(2.4)	1.95	0.28	1.4	安山岩	円盤式
68	31	22	表様	石器	石盤	1.2	1.2	0.25	0.3	安山岩	平盤式
69	31	22	北東部 包合層 2	石器	石盤	2.85	1.85	0.32	1.2	安山岩	円盤式 基部半分が欠損する
70	31	22	トレンチ 西側上位	石器	石盤	1.72	1.7	0.5	1.6	安山岩	円盤式 表面く風化
71	31	22	北西部 包合層	石器	剥片	3.75	3.2	1.1	124	黒曜石 (巣島産)	鋭い縦刃を呈する 断面形状は不規則形
72	31	22	トレンチ 包合層	石器	石盤	3.2	1.85	0.4	2.1	安山岩	断面全体、風化が著しい 断面斜面は變形
73	31	22	包合層	石器	打痕石等 未製品	16.9	10.1	2.8	494	安山岩系か	全体に地成をうけている
74	31	22	南西部 包合層 2	石器	剥片	5.6	4.95	0.65	23.2	無風基質安山岩	
75	31	22	トレンチ 包合層	石器	石核?	5.3	5.8	1.45	626	安山岩系	
76	31	22	N R 2 (黒褐色質土)	石製品	石盤	5.95	6.0	0.95	389	火山岩	器表全体に擦耗が著しい
77	31	22	包合層	石製品	鏡	(4.4)	(2.0)	1.5	19.3	赤色頁岩	鏡面 (裏面) の表面は全く研磨されていない 多數の擦痕が残る
78	31	22	遺物包合層 上層	鉄器	鍔	4.1 残	1.9	0.5	7.8		柄部残存長 0.7cm

IV 自然科学分析

明力遺跡出土炭化材などの年代測定および出土種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山口県柳井市伊保庄地区に所在する明力遺跡では、過去の発掘調査で様々な遺構・遺物が確認されている。本分析調査では、谷沿いで検出された湿地帯 (NR1) を対象とする。湿地帯内からは、遺物は少量しか出土しておらず、粘土質土壤が堆積する。

今回は、湿地帯内より出土した炭化材、種実、土器付着炭化物を対象とした放射性炭素年代測定を実施し、湿地帯の埋没年代に関する資料を作成するとともに、出土種実の同定を実施し、当時の植生や植物利用についての検討を行う。

1 放射性炭素年代測定

(1) 試料

放射性炭素年代測定試料は、黒褐色粘質土から出土した炭化材 2 点 (No.A, B)、黒色粘土から出土した種実 1 点 (No.C)、黒褐色粘質土から出土した土器付着炭化物 1 点 (No.D) の、計 4 点である。No.A は落葉広葉樹で高木～小高木のナシ亞科の炭化材で一部未炭化、No.B は落葉広葉樹で高木～小高木のカエデ属の炭化材、No.C は落葉広葉樹で高木のオニグルミの核に同定された。No.D の土器片は小破片であり、詳細な時期は不明とされる。

No.A～C は適量を削り取り、さらに周囲を削って 50mg 程度に調整し分析試料とする。炭化材の樹種の確認は、試料調整時に周囲を削り落とした試料を使用した。No.D は土器付着炭化物を 50mg 程度採取し、分析試料とする。

(2) 分析方法

試料は、塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。試料が化学的に脆弱な試料は、炭素の損耗を防ぐため、アルカリの濃度を薄くする (AaA と記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,668 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One

第 11 表 放射性炭素年代測定結果

試料 No.	種別/性状	方法	補正年代 (曆年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代					Code No.
					年代値			確率%		
A	度化材 ナシ亜鉛	AAA (IM)	9025±30 (9026±32)	-24.41 ±0.46	σ	cal BC 8279 - cal BC 8247	10228 -	10196 calBP	68.2	YU- 8746
					2σ	cal BC 8290 - cal BC 8228	10239 -	10177 calBP	95.4	
					σ	cal BC 8812 - cal BC 8732	10761 -	10681 calBP	68.2	
B	度化材 カエデ属	AAA (IM)	9480±30 (9479±29)	-27.90 ±0.53	2σ	cal BC 9114 - cal BC 9080	11063 -	11029 calBP	4.2	YU- 8747
					σ	cal BC 9054 - cal BC 9021	11003 -	10970 calBP	3.7	
					2σ	cal BC 8842 - cal BC 8702	10791 -	10651 calBP	83.7	
C	種実 オニグルミ	AAA (IM)	9380±30 (9381±30)	-28.50 ±0.54	σ	cal BC 8710 - cal BC 8621	10659 -	10570 calBP	68.2	YU- 8748
					2σ	cal BC 8744 - cal BC 8571	10693 -	10520 calBP	95.4	
					σ	cal BC 8733 - cal BC 8694	10682 -	10643 calBP	31.0	
D	土器付着 度化物	AaA (O.000IM)	9410±30 (9411±29)	-25.88 ±0.48	2σ	cal BC 8684 - cal BC 8640	10633 -	10589 calBP	37.2	YU- 8749
					σ	cal BC 8771 - cal BC 8621	10720 -	10570 calBP	95.4	
					2σ					

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。

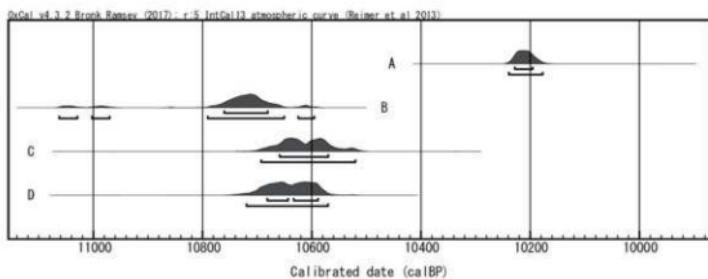
4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

5) 曆年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。

6) 曆年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7) 較正データーセットはIntCal13を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

第 32 図 曆年較正結果

Sigma68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach,1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正用に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk,2009)、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al.,2013) である。

(3) 結果および考察

結果を第11表に示す。土器付着炭化物は化学的に脆弱であったため、炭素の損耗を防ぐためにアルカリ濃度を薄くした（通常の一万分の一）。回収された炭素量は、加速器質量分析装置を用いた年代測定に十分な量が確保できた。

同位体効果を考慮した測定値は、No.A（ナシ亜科炭化材）が $9,025 \pm 30$ BP、No.B（カエデ属炭化材）が $9,480 \pm 30$ BP、No.C（オニグルミ核）が $9,380 \pm 30$ BP、No.D（土器付着炭化物）が $9,410 \pm 30$ BP である。

曆年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することによって、曆年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer et al.,2013) を用いる。

2σ の値は、No.A（ナシ亜科炭化材）が $10,239 \sim 10,177$ calBP、No.B（カエデ属炭化材）が $11,063 \sim 10,596$ calBP、No.C（オニグルミ核）が $10,693 \sim 10,520$ calBP、No.D（土器付着炭化物）が $10,720 \sim 10,570$ calBP で、縄文時代早期初頭頃にあたる。

湿地帯の埋没年代は本分析結果からみると、縄文時代早期初頭頃に埋没した可能性が考えられる。

2 種実同定

(1) 試料

試料は、NR1 黒褐色粘質土（湿地堆積帶土）（試料 No.1～5）、NR1 黒色粘土（湿地堆積帶土）（試料 No.6.7）、NR1 黒色粘土内（湿地堆積帶土）（試料 No.8）、NR1 黑色粘土（湿地堆積帶土）（試料 No.9.10）から出土した種実遺体 10 点である。

試料は水浸の状態で、ポリ袋に入っている。各試料の詳細は、結果とともに第12表に示す。

(2) 分析方法

試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施する。

結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、種実遺体各分類群の写真を添付し、状態良好な一部の種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果や特徴等を一覧表に併記して同定根拠とする。

分析後は、種実遺体に容器に入れ、約 70% のエタノール溶液で液浸保存する。

(3) 結果および考察

同定結果および計測値等を第12表に、各分類群の写真を写真4に示す。

10 試料を通じて、木本 6 分類群（オニグルミ、ナラガシワ、オガタマノキ、ブドウ属、クマノミズキ、ハクウンボク）7 個の種実遺体が同定された。3 試料（試料 No.1、試料 No.7、試料 No.8）は同定ができなかった。

試料 No.7、試料 No.8 は、分類群が不明で、試料 No.8 は果実と考えられる。試料 No.1 は、植物片

第12表 種実同定結果

試料No.	出土地点	出土層	分類群	部位	状態	個数/容積	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
1	NRI	黒褐色粘質土 (湿地堆積帯土)	不明	不明	破片	2cc	10.67 +	-	-	種実か樹皮等植物片か不明
2	NRI	黒褐色粘質土 (湿地堆積帯土)	オニグルミ	核	破片	1	21.56 +	25.23	12.26 +	頂部欠損、 厚さ半分厚
3	NRI	黒褐色粘質土 (湿地堆積帯土)	ナラガシワ	幼果	完形	1	7.10	15.48	-	柱頭1本残存
4	NRI	黒褐色粘質土 (湿地堆積帯土)	ハクウンボク	種子	完形	1	13.49	7.66	-	食痕(径2.4mm)
5	NRI	黒褐色粘質土 (湿地堆積帯土)	オガタマノキ	種子	完形	1	6.73	8.16	3.01	ホオノキよりも横長、 背面の縦溝が多い
6	トレンチ 南側 (NRI)	黒色粘土 (湿地堆積帯土)	ナラガシワ	殻斗	破片	1	8.57	16.27	-	表面磨耗、 残存厚0.95mm
7	トレンチ 南側 (NRI)	黒色粘土 (湿地堆積帯土)	不明	種実 (果実?)	完形	1	4.49	2.65	1.97	基部やや縮まり 腹面方向に溝曲、 表面平滑、低い輪座数本、 キク科果実に似る
8	NRI	黒色粘土内 (湿地堆積帯土)	不明	果実	完形	1	9.11	7.75	-	果実5裂、果皮厚1.3mm、 表面凹凸、種子1個入る。 種子長25.48径4.25mm、 重な横円体。 クサボウやネズミモチ属に似る
9	NRI	黒色粘土 (湿地堆積帯土)	クマノミズキ	核	完形	1	3.33	4.04	-	
10	NRI	黒色粘土 (湿地堆積帯土)	ブドウ属	種子	完形	1	4.24	3.56	2.31	基部尖る、 合点径1.2mm、やや突出、 サンカクヅルやアマヅルに似る

注)計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「+」で示す。

複数(2cc)が確認されるが、分類群・部位ともに不明である。

同定された種実遺体の保存状態は、比較的良好である。試料No.2のオニグルミや、試料No.9のクマノミズキは、河畔林要素の落葉高木である。試料No.3で幼果が、試料No.6で殻斗が確認されたナラガシワは、本地域の山地や丘陵にも多くみられる落葉高木である。試料No.5の常緑高木のオガタマノキは、暖地の沿海地に生育する常緑高木である。試料No.4の落葉小高木のハクウンボクや、試料No.10の落葉藤本のブドウ属は、河畔や林縁等などの明るく開けた場所を好んで生育する。

これらの出土種実は、放射性炭素年代測定結果で示された縄文時代早期初頭頃の明力遺跡周辺の河畔や森林の林縁等に生育していたと考えられる。

植物利用に関して、堅果類のオニグルミは、核内部の子葉が食用可能である。ナラガシワは、あく抜きを施することで果実内部の子葉が食用可能となる。ブドウ属は、種子を包む果実が食用可能である。今回の出土種実には、人による明確な利用痕跡は確認されないが、当時の明力遺跡周辺の森林から持ち込まれ利用された可能性は充分に考えられる。

引用文献

- Bronk RC., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 石川茂雄, 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010. 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大出版会, 678p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977. Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012. ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種-. 誠文堂新光社, 272p.



1. オニグルミ 核(試料No. 2)
 3. ナラガシワ 肢斗(試料No. 6)
 5. ブドウ属 種子(試料No. 10)
 7. ハクウンボク 種子(試料No. 4)
 9. 不明 種実(試料No. 7)
2. ナラガシワ 幼果(試料No. 3)
 4. オガタマノキ 種子(試料No. 5)
 6. クマノミズキ 核(試料No. 9)
 8. 不明 果実(試料No. 8)

写真4 明力遺跡N R 1 出土種実

V 総括

今回発掘調査を実施した追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡は、室津半島北部の東側にあり、現在の海岸線からはやや西に入った位置にある。東に約5km隔てた周防大島を臨み、間は穏やかな内海となり、遺跡は海路の利用に適した場所にある。

以下、各遺跡の調査結果から考えられる点や課題等について、ふれておきたい。

迫遺跡

大星山の東麓から東に張り出す丘陵の先端にあり、標高は約18m、東側は和田石川が形成する谷に向かって落ち込む。調査区の西半部のみに花崗岩バイラン土の地山が検出され、主に鎌倉時代～室町時代の遺構や遺物が確認された。丘陵先端部のみの調査のため、集落全体の規模は不明であるが、地形等を考慮すると、周辺の東に向かって張り出す同様の幅の狭い丘陵上にも中～小規模の集落が散在する可能性が高い。また、弥生土器や古墳時代の土師器も出土しており、丘陵の上位には、より古い時期の集落等が存在するものと予想される。

明力遺跡

調査区は、和田石川が形成した谷間にあたり、土石流や洪水堆積物が重層的に堆積している。平成28年度国営緊急農地整備事業に伴い、柳井市教育委員会が調査を行った東側隣接地の明力遺跡（集落跡）とは様相を異にする。市の調査では、遺構が北東部に偏って検出され、要因として南西側を流れる和田石川の氾濫の可能性が指摘されたが、今回の調査ではそのことを傍証する結果となった。

調査では、土石流や洪水による堆積層から、弥生時代～中・近世の遺物が出土し、調査区北側の上位に同時期の集落等の存在が予測される。

湿地帯（N R 1）は、土石流堆積層上に形成された自然の窪みとみられ、黒褐色シルト内から種実や小枝が多数出土した。高杯脚部のほか、土器片2点にはタタキ痕が認められ、古墳時代頃の埋没とみられる。一方、IV章掲載の出土種実や土器付着煤の年代測定結果は、縄文時代早期の可能性を示す。大きな年代差が生じた理由については、今後幅広い視点で検討する必要があろう。

前岡河内遺跡1地区

S X 1 の縄文土器中、深鉢34については外面に3条以上の凹線が認められ、晩期前葉以前に遡る可能性が高い。この1点以外は、概ね晩期後葉の刻目突帯文期のものと考えられる。

精製浅鉢は屈曲した肩部に外反しながら立ち上がるやや長めの口縁部がつくものが多く、口縁部内面に粘土を貼り付け肥厚させたり沈線を施すものがある。9のように口縁部が玉縁状を呈するものがあるが、明瞭な鍵形を呈するものはみられない。また、逆くの字状を呈する浅鉢はみられない。

深鉢で口縁部～胴部までの形状がわかるものでは、緩やかに弧を描いて屈曲し口縁部外面に刻目突帯を貼付するものが多く、さらに口唇部にも刻目を施すものが多い。また、施文には、17のような谷尻式にみられる爪形文がある。頭部と胴部境界が逆くの字状に屈折する北部九州に典型的な深鉢はほとんどみられない（24・28・36は小片のため不明）。なお、壺形土器は認められない。

土器の形態的な特徴は、主に小南裕一が指摘する（小南2003）西部瀬戸内地域にみられるものである。県内では府防市奥正権寺遺跡例が近い時期の資料とみられるが、粗製深鉢の口縁部に刻目をもつ割合が高い点や施文の特徴は、愛媛県松山平野の大瀬遺跡や福成寺遺跡・旦之上遺跡例により近似する。

時期的には晩期後葉と考えられ、県東部では数少ない当該期の資料と評価できる。

今回縄文時代の遺構は検出されなかったが、S X 1出土土器や石器は日常使用品の投棄と考えられ、周間にドングリ等の貯蔵穴や住居等が埋存する可能性は高い。室津半島周辺の縄文時代の遺跡には、黒島浜遺跡、宮田遺跡、与浦遺跡、周防大島町中津原遺跡、上関町田ノ浦遺跡等、波打ち際やさらに低い位置に立地する遺跡がある。その原因是、これまで地殻変動による地盤の沈下が考えられている。一方、室津半島西岸の平生町岩田遺跡は、標高8m以上の砂丘上に立地する大規模な集落跡で、多数のドングリ貯蔵穴が検出された。1地区付近に推定される集落跡は標高12m前後で、岩田遺跡に近い立地だが、大規模な集落は想定しにくい。

なお、1地区S X 1出土土器の示す晩期後葉という時期は、西日本の各地でも稻作が導入から定着へ移行する段階にあたり、将来的に周辺から当該期の稻作痕跡が発見される可能性もある。

S K 1は土師器を礫とともに投棄しており、一応、土坑としたが、東に向かって下る落ち込みの始まりの可能性もある。投棄された土器は5世紀代のものであり、同期の土器は今回調査した各遺跡からも出土することから、周辺に集落が同時展開していたものと考えられる。

前岡河内遺跡2地区

調査区は1地区の南にある。洪水堆積土が重層的に堆積し、堆積土中には古墳時代～中世の遺物を包含する。地形的には、1地区と南西から流下する中村川左岸の丘陵との間の谷間にあたると考えられる。堆積土中に形成された自然流路は、いずれも古墳時代以降の遺物を多く含む黒色弱粘質土から落ち込んでおり、北側のN R 1は最下層の砂層に縄文土器・弥生土器片を含み、上位の堆積土に古墳時代の土師器・須恵器を含む。南側のN R 2は、堆積土に古墳時代の土師器・須恵器を含む。両流路とも、古墳時代終末期頃埋没したものと考えられる。堆積土中から出土した遺物は中村川左岸の丘陵に由来するものが多いと考えられる。

なお、2地区で出土した縄文土器は、1地区と同様に晩期後葉のものが多いが、精製浅鉢に鍵形口縁をもつものや、粗製深鉢胴部に抉りによる段をもつものがある等、若干時期幅は広いとみられる。

伊保庄地区は、上記の縄文時代遺跡以外にも弥生時代の高地性集落が幾つも知られ、前岡河内遺跡南側の丘陵上にある向田遺跡の調査では、奈良時代に銅精錬が行われたことが判明している。平安時代～中世にかけては、一帯に京都賀茂神社の荘園が営まれておらず、歴史的にも重要な地域である。

今回の調査では、これらの遺跡との関連性を把握することはできなかった。しかし、この地域の各時代に営まれた遺跡の全容を知ることは、伊保庄地区的のみならず、柳井市や周防さらには西部瀬戸内地域の歴史を考える上でも重要であり、今後の発掘調査等による解明に期待したい。

参考文献

- 柳井市教育委員会2018『柳井市伊保庄地区明力遺跡』柳井市埋蔵文化財調査報告書第15集
小南裕一2003『西武瀬戸内地域の刻目突帯文土器編年試案』『立命館大学考古学論集III-1』立命館大学考古学論集刊行会
小南裕一2001『奥正権寺遺跡S K - 1出土土器の再評価-成立期刻目突帯文の諸問題-』『山口考古第21号』山口考古学会
山口県教育委員会1984『奥正権寺遺跡 I』山口県埋蔵文化財調査報告書第77集
松山市教育委員会2000『大割遺跡-1・2次調査-』松山市文化財調査報告第77集
(財)愛媛県埋蔵文化財センター2005『福成寺遺跡・旦之上遺跡埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書第118集
(財)山口県教育財团山口県埋蔵文化財センター2000『向田遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第17集

追遺跡図版



追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景（東から）



迫遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景（西から）



迫遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景（北から）

図版2



追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡遠景（南西から）



追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡調査区全景（上空から）



調査区全景（上空から）



完掘全景（南から）

図版4



完掘全景（北から）



調査区南西部西壁土層断面（東から）



トレンチ2北壁（南から）



柱穴群、SD 1、トレンチ2・3（東から）



柱穴群、SD 1、トレンチ2・3（北から）



柱穴群、SD 1、トレンチ 2・3（西から）



SK 1 完掘（南から）



SK 2 完掘（東から）



SD 1 完掘（北から）



トレンチ 3 石列検出状況（南東から）

图版6



出土遗物

明力遺跡図版



明力遺跡調査区全景（上空から）



完掘全景（西から）



調査区東壁中央部土層断面（西から）



用水路南区北壁土層断面（南から）



NR 1 完掘（西から）



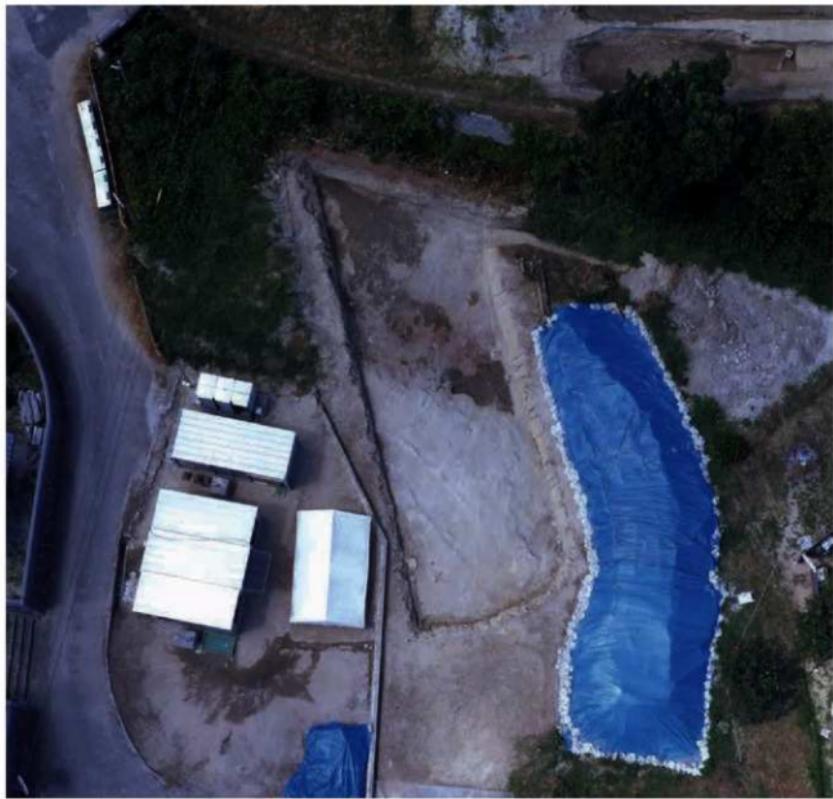
NR 1 土層断面（西から）

图版 8



出土遗物

前岡河内遺跡 1 地区図版



前岡河内遺跡 1 地区調査区全景（上空から）



完掘全景（南西から）



調査区東壁土層断面（北西から）



調査区東壁北部土層断面（西から）



調査区東壁中央部土層断面（西から）



調査区東壁南部土層断面（北西から）

図版 10



SK 1 遺物・礫検出状況（西から）



SK 1 北半部遺物・礫検出状況（西から）



SK 1 完掘（南西から）



SD 3 土層断面（南東から）



SD 3 遺物出土状況（東から）



SD 1・2・3 完掘（北西から）



SX 1 土層断面（北西から）



SX 1 遺物・縄検出状況（南西から）



SX 1 弥生土器出土状況（北から）



SX 1 縄文土器出土状況（南西から）

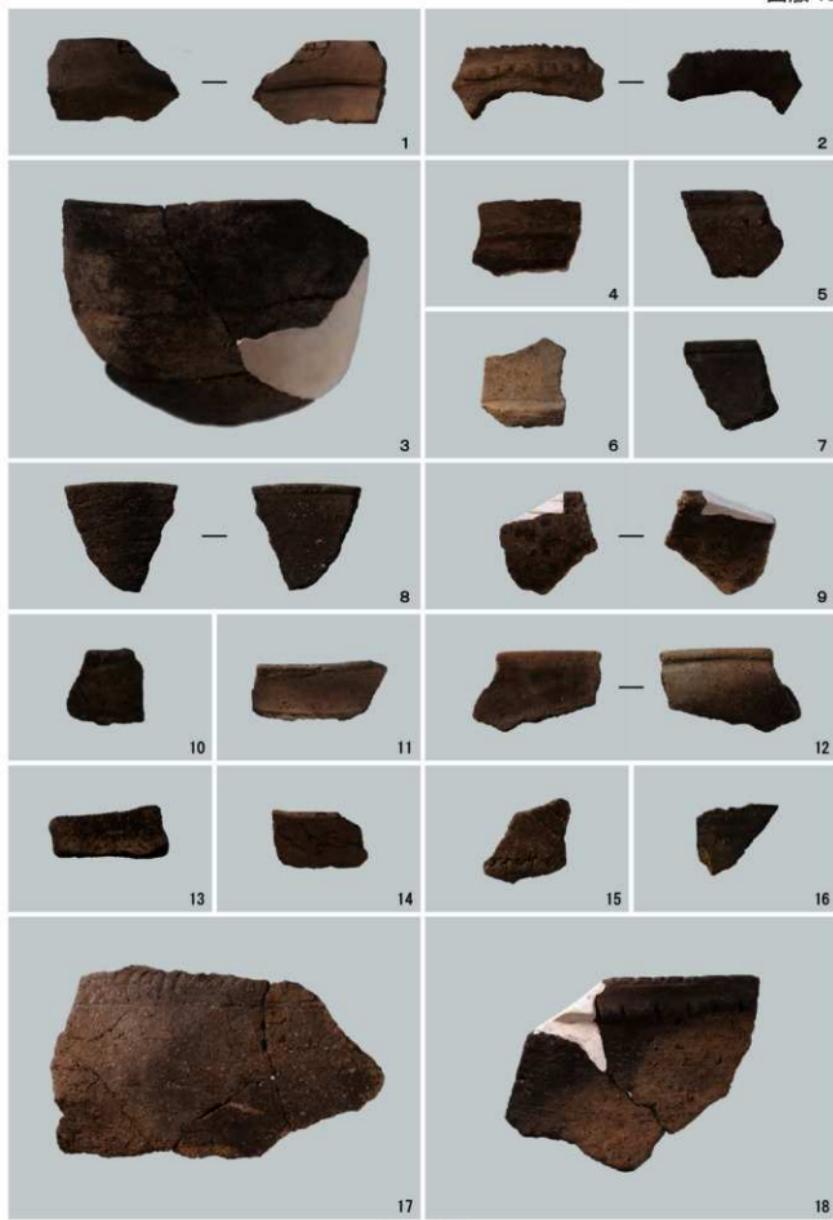
図版 12



S X 1 繩文土器出土状況（南から）



S X 1 完掘（南西から）



出土遺物①

图版 14



出土遗物②



出土遺物③

图版 16



出土遗物④

前岡河内遺跡 2 地区図版



前岡河内遺跡 1 地区調査区全景（上空から）



完掘全景（南から）



完掘全景（北から）

図版 18



N R 1 完掘（南西から）



調査区北壁西側（南から）



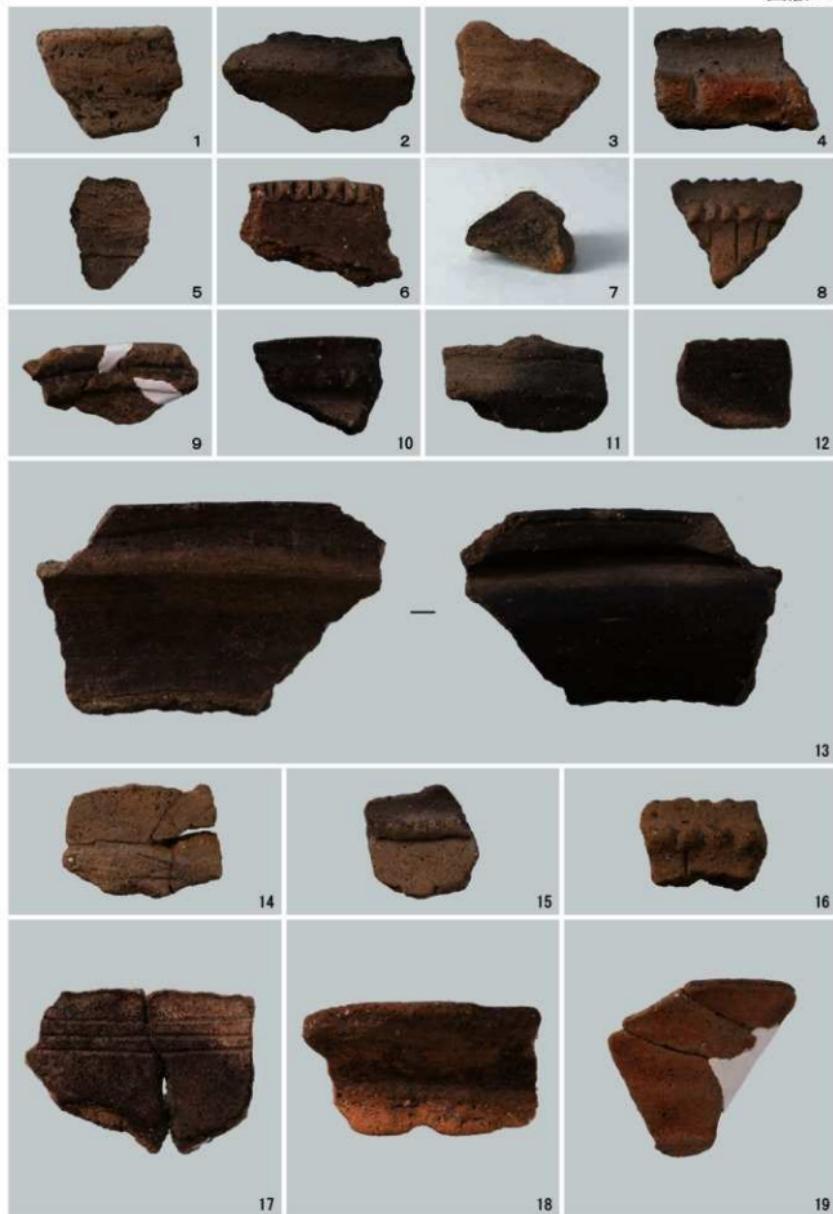
調査区北壁東側（南から）



N R 2 完掘（北から）



トレンチ完掘（北西から）



出土遺物①

图版 20

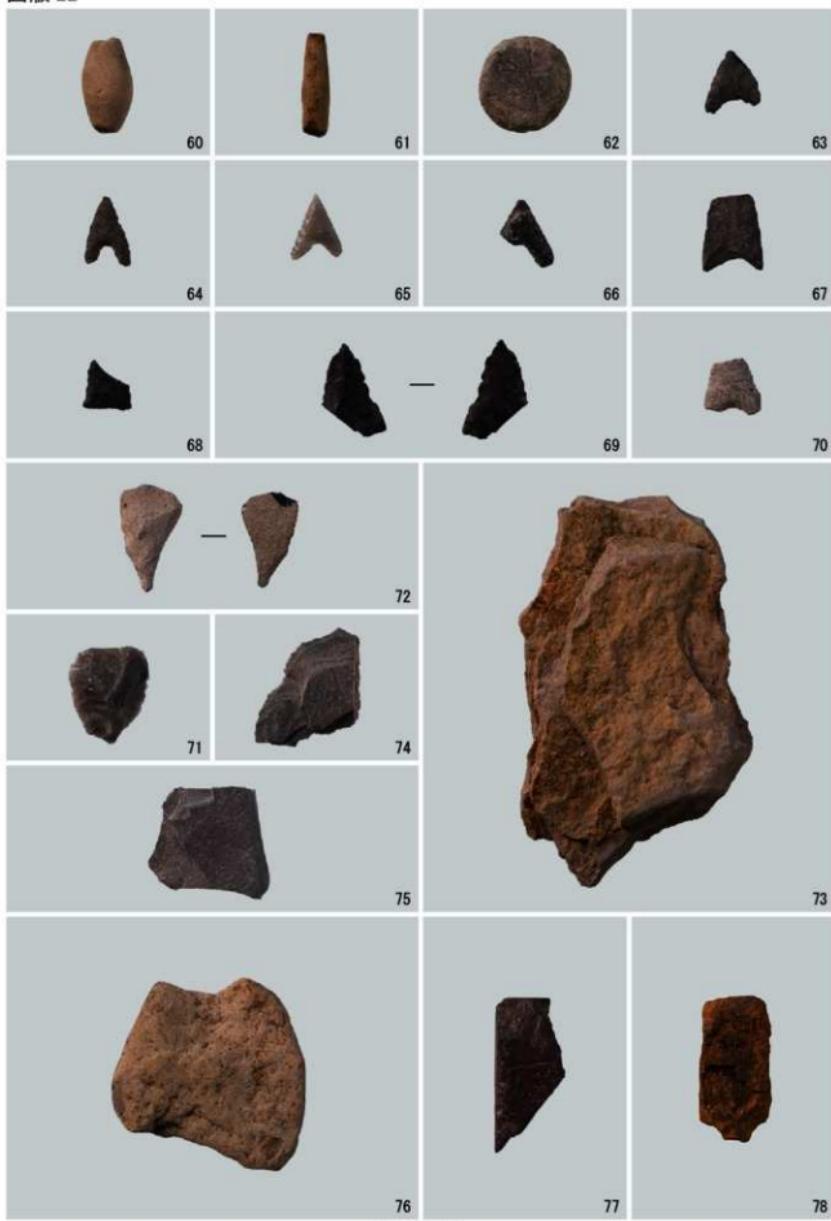


出土遗物②



出土遺物③

图版 22



出土遗物④

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さこいせき・めいりきいせき・まえおかごうちいせき				
書名	追遺跡・明力遺跡・前岡河内遺跡				
副書名					
卷次					
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告				
シリーズ番号	第102集				
編集著者名	石井龍彦 森田孝一 山田圭子				
編集機関	山口県埋蔵文化財センター				
〒	753-0073				
所在地	山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060				
発行年月日	西暦2019年3月25日(平成31年3月25日)				

所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ○○° ○○' ○○"	東経 ○○° ○○' ○○"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
追遺跡	山口県 柳井市	35212		33° 55' 24"	132° 07' 08"	20180509	403.4m ²	県道 改良
明力遺跡	伊保庄			33° 55' 23"	132° 07' 11"	20180905	235.2m ²	
前岡河内遺跡				33° 55' 22"	132° 07' 11"		314.5m ²	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
追遺跡	集落	中世	土坑 溝 柱穴	5基 1条 58個	土師器 須恵器 瓦質土器	追遺跡は、鎌倉時代～室町時代にかけての溝や柱穴を検出。	
明力遺跡	散布地	古墳時代	自然流路	1条	土師器 種実	前岡河内遺跡1地区では、落ち込みから縄文時代晩期の土器がまとまって出土。	
前岡河内遺跡	集落	縄文時代 古墳時代	土坑 溝 自然流路	1基 1条 2条	縄文土器 土師器 石製品		

要約	追遺跡は、主に鎌倉時代～室町時代の遺構が検出され、同時代の集落跡であることが判明した。 明力遺跡は、土石流で形成された遺物包含層を主体とし、古墳時代の埋没とみられる湿地帯が検出され、種実や枝等が出土した。 前岡河内遺跡1地区は、古墳時代の土坑や平安時代の溝が検出され、落ち込みから縄文時代晩期の土器や石製品がまとまって出土した。 前岡河内遺跡2地区は、遺物包含層を主体とし、古墳時代に埋没したとみられる自然流路2条が検出され、縄文時代晩期～古墳時代にかけての遺物が出土した。

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第102集

追遺跡 明力遺跡 前岡河内遺跡

2019年3月25日

編集・発行 公益財團法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印 刷 児玉印刷株式会社

〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号